

四時間も一刻半三時間或は二時間半位にして、午後五時頃から八時頃でおヒラキにしたい。初炭懷石中立續薄茶でよい、初炭もやめてよい。

その一つは道具が多すぎる。懷石器具を見せるべく御馳走が多すぎる。酒もすすめられすぎる。物資不足の折から心いれの品があるとしても一品でよい。主客共に道具に酔ひて時間を潰し、甚しきは主人の増長慢を來たすなど困る。器の奴隷になつてはならぬ。

その一つは食事の簡素である。茶が主で食事はつけたりである。汁と向と一汁一菜さては汁と向と煮物と一汁二菜で澤山である。酒も三献でよい。

その一つは茶人仲間といふ閉鎖社會の解放といふ事である。茶道と號する形式的儀禮にとらはれ、舊時代に出來た好みを正式とし、宗匠とか道具屋その手代そうした玄人がる連中から植木屋出入の職人まで狩出しになるなどはかへつて不愉快である。

まあそうした注文が重なるものであるが、その他あまりに細々しい作法に囚はれすぎるとか、主人側の心の入れ方が之れでもか之れでもかあまり人念に、しかも露骨になりすぎるとか。くさぐさの意見もあるが、詮じつめると簡素にしてむしろその昔にかへれ。同時に我々の衣食住も變つて來た。洋服の場合、椅子席の場合、さらに大寄せの活用等々それに新體制が考へさせられる。器具の觀賞はたし

かに好ましい。しかしそれには程がある。あまりに高價とあつては粗相があつてはと恐れをなさざるを得ない。器物もどしどし新しいものを使ひたい。與次郎とか寒雉とか仁清とかいふ品々もかつては皆新しい道具であつた。

(猶此秋の「美術工藝」志中なる卑稿雅俗山莊茶會記参照乞ふ)

九、バラと蝦夷入

ある文献によれば、

茶道では佗といふ心を貴ぶ。佗の心がけがないと茶が面白く點たず、茶の湯に風情がない。佗は俗に佗び住居などと稱して、不自由な生活の意味に使はれるけれども、茶道の佗は不自由といふのではなく、極めて單純な様式の中に眞の生活を見出すことである。殊に利休の提唱した佗の茶草庵の茶の湯では、四疊半あるひは二疊三疊の小庵を建て、破れた茶碗、竹の茶匙でも用を辨ずるとして、最低の貧者の生活を標準とする極端な單純簡易の生活を工夫した。

とある、要は我等は利休の昔にかへればよい。それは歌道に於て、萬葉の昔にかへればよいといふと同じ事である。

友人からの又聞きだが、藤原銀次郎翁は、かつて茶席にバラを生けたところ高橋箒庵老から茶の傳統に反するといふので異端扱ひにされといふ事である。たまたま藤原老とある招宴に卓をならべたから、事の眞偽をたづねると、大體青磁には牡丹を活けるべきであり、バラに至りてはトゲがあり、佛前にも忌む。いはんやバラは舶來ものでありバタ臭い、まあそうした數罪俱發でヤリコメにかかつたらしい。しかし藤原老にいはすと、トゲがあるからいけないといふならば、木槿もある濱茄子もあるバラだつてかまはないといふので勝つたのだといふ。そうすると友人から聞いたのは軍扇の上り方がちがつた事になるが、箒庵老もはや故人になつてゐるから今さらそんな論議の勝敗を蒸しかへす事も出来ないが、何よりもどの花がよいか悪いか、それは誰が決めるのか世の中が移りかはればすきこのみもかはる、花を生ける器具もかはる、珍らしい珍らしい花も新規に増してくる。舶來といへばお茶そのものも舶來である、バラは西洋ものといふが、昔から野バラもあつた。要は花と花を活ける器具と、床の間なり茶室のつくりなり、すべてが見た目がふさはしいかどうかといふ事である。藤原翁のバラの話聞いて連想したのは短歌の月並時代の昔話である。

短歌も自由無碍の萬葉時代から古今新古今と段々専門化し、徳川時代にはすつかり技巧化傳説化され、香川景樹の歌すら異端視されて江戸におりきれず京へかへつたといふ、その頃の歌道では柿を歌

題に出来なかつたといふが、バラを生けていけないといふのとよく似てゐる。

昨夏樺太の豊原にて小河長官々邸に招かれた時、食卓に雜草である蝦夷入の花が活けられてあつたのが、何よりも場處柄うなづかれた。それは、蝦夷入の花も、食卓の瓶に活けると見られるといふばかりで無い。もし温室か何かで金のかかつた花を活けたとしたらばどうか？ それは無駄である、もつたいない。我等は山奥でサシミや天ブラを喰うとは思はない、蕨でよい山の芋でよい。儀式作法で何んといはうも、そうした時代には、蝦夷入の花などは知られてない。知られてゐたとして何故に活けてよしわるしなどキメてかかるのか。それが分らないのである。

十、半月庵不圖

石黒況齋翁は趣味に貧富貴賤の別なきを強調して次の如く話されてある。

徳川時代の茶會が隆盛を極めたといふ事に關して考へて見ますと、其第一原因は當時の社會で最も重んぜられ、従つて最も煩鎖な事として忌まれた「階級」といふ事を忘却する念が在つた様です。例へば當時の大名と旗本とは、平生の交際では段違ひで其間に大なる溝渠があつたのですが、一たび茶席で同坐すると、其溝渠が取除かれて平等の地位になる事が出来たのです。又大名と町人、旗本と町人

などは滅多に一堂に會する事が出来なかつたのですが、一旦茶會に列すると、共に五客の中に交り、四疊半一室の中に膝を交へて着座し、親しく談話することが出来たので、此一事が茶會の何よりの樂しみであつたやうです。そこで大名の茶會に町人が招かれるといふことも珍らしくなかつたのです。但し町人の茶會に大名が招かれて列席した例は多くありませんが、雲州の松平不昧公などは町人の招きにも行かれた様です。茶を機會に、色々な事が行はれたといふのは、利用か悪用かで本旨ではありません。

恐らく戰國時代の茶事には茶による氣分の轉換といふ事もあらう、和敬清寂の境地も味はれたであらうが、又かなり茶會はいろいろの意味に利用された事であらう。豊臣秀吉は木下藤吉郎時代に宗及の許に茶儀を學んで奥儀の許しを得てゐる。そのはじめは、主人信長にとり入るつもりでもあつたらう、さりとて何もわるい事ではない。しかも秀吉は茶を唯一の樂事としてゐたのである。

石黒況齋翁の茶事のいかに簡素であつたは、その一例として、小松宮様の御成りの折のお話を披露する。

故小松宮彰仁親王には、當方では石黒を度々招くが未だ招かれた事が無いと仰せられたので、石黒は當世の者が御成を願ふやうな心得でお招きいたしませぬ。就ては十五日間の御猶豫を願ひますと御

答へして、翌日から粗末な安材木の四疊半の茶室をつくり半月庵と名づけた。茶號はといふ御たづねに「不圓」と申上げると半月だからかとの仰せ故に、宮様の御成ゆゑ凡て新調しましたが、いづれも一圓を超えざる故と御答へしたとの事である。

明治も早い頃ゆゑ物價にも大きな開きがあるが、それにしても一圓未滿といふのだから、まさに簡素そのものに相違ない、しかも宮様の御成りを願つたといふのだから、特にここに記したのである。

十一、和敬會規約

猶くどい様であるが、さらに況齋翁の和敬會の記事をうつし茶道の新體制、實はその昔の舊體制である事をくりかへす事にする

和敬會の事

私は同好の茶友、古帆東久世通禧伯、心月松浦詮伯、玄遠祐鷹子、宗幽伊藤雋吉男、市隱戸塚文渡是、松籟三井八郎次郎君、葆光三田君、松翁安田善次郎君等十五人と共に明治三十三年に和敬會を作つて茶儀の交を厚うしました。總勢十六人ですから十六羅漢などと申されましたが、公卿も大名も文武官醫者も富豪も學者も米や漆の商賣の方もあつて實に楽しい仲間でした。老年者の多い事とて其後

缺けては補充しました。今左に、東久世伯の筆を執られた和敬會の規約を記して、茶話を終ることゝします。

一、和敬清寂の本旨を守るべき事

一、器は新たを選ばず結構を好むべからざる事

一、食は淡薄を主として厚味を備ふべからざる事

珠光曰茶は遊に非ず藝にあらず、又、放座に非ず、一味清淨法也、又曰茶道を以て禮を行ひ茶禮を以てもを飲宗甫居士曰茶の場の場とても外なし、君父に忠孝を盡し家々の業を懈怠せず、殊に舊友の交りを失ふ事なかれ、又曰道具とてもさして寄べからず、珍敷名物とても、かはりたる事なし、古きとて其昔は新し、唯家に久しく傳りたる道具こそ名物なれ、形よろしきは捨べからず、多を羨す、少をいとはず、一色の道具たりとも、幾度ももてはやしてこそ子孫にまで傳ふべけれ。

宗關居士曰器を愛して風情を好むは形容をのみ楽しむ數寄者也。心から楽しむ數寄者こそ實の數寄者こそいふべけれ。譬ば千貫萬貫の道具たりとも炭斗瓢ひとつほどの意に叶まじ、又曰見せものに仕候得ば實より虚になり申候、右様のしなし候故眞實も道理も失ひ申につき茶湯は諸道の惡魔になり又奢の根本にも罷成申候

右先師の遺訓を遵守し相互に和平禮を正し、懈怠の邪念を退け斯道の清閑雅趣を楽しみ交友の信を存せむことを約すと云。

明治三十三年一月

和敬會

有約親朋會我家 瓶中挿得早梅花

懇懃相囑莫嫌薄 妻調藜羹我點茶

十二、世阿彌の花傳書

能、謡曲、狂言等については言及の暇もないが、謡曲の優美な典雅な筆致はまさしく一種の風格を備へてゐる、その二百十餘番の謡曲中百二十五番までは足利義滿の臣であつた世阿彌の作であり、しかも世阿彌は作者として第一人者であり、又能の役者としても第一人者であつたといふ事は驚くべき事である。世阿彌の選著は近頃發見され、その偉大なる功績が世間に稱へられて來たが、猿樂の藝道に關する十數種の著作の内に花傳書といふのがある。此書につき大審院判事三宅正太郎氏は次の如く話してある。

世阿彌の考へ方は、今の我々の考へ方はよほどちがつてをりますが、私はその考へ方に日本固有の精神を發見しうる様に思ふのであります。先づこの人の「花傳書」といふ本の中に花を知ることを口傳として説いておます。猿樂の藝道に於て觀る人に感動させる枝を花といつてゐるのでその技を學ぶにはまづ四季の花を何故に人がめづるかといふことを考へよといひ、抑も花といふは「萬木千草に於て四季折節に咲くものなれば、その時を得て珍らしきゆゑにもてあそぶなり」と記してをります。つまり正月元日から大晦日まで同じ花が咲いてゐたのでは、どんなに美しくとも人はめでない、春には春の花が咲き、秋には秋の花が咲くので、そこに花の美しさがある。即ち珍らしいと感ぜしむることが花の第一歩だといふのです。尤も珍らしいと云つた處で、突飛なものは花ではない。珍らしく感ぜしむる技を持つ達人は、恰も四季のあらゆる花の種を揃へて持つてゐる如く、あらゆる滿枝の物敷を盡し、あらゆる變化を體得して、いつでもその場合に應ずる、最もよき花を咲かし得る人でなくてはならない。「物敷を盡して工夫を得てめづらしき感を得るが花なり」とか、「能も住するところなきをまづ花と知るべし」と記してあるのがその意味であります。

今この「花傳書」の口傳の言葉を、法律の上にあてはめて考へますと前に申すやうに、現在の法律は一般に知らせる爲に、一定の文章で書いて一律に行ふことを保證しておます。だから法律は春夏秋冬、正月元旦から十二月三十一日まで同じ法です。又その規定する所も細かい所まで世話を焼いて居て、斟酌の餘地が乏しいやうに出來てゐる。さうであるとすれば法律には「花傳書」にいふところの花がないわけであり、國民をひきつける魅力に乏しい理であります。

日本人は法律にも花がほしいと思ふ習性を持つてゐる。少くとも法律の現はれである裁判には花が欲しいと思つておます。だから裁判官に、變化の妙を盡すだけの餘地を存し、そこで花を具現すべきだと思ひます

これも世阿彌の「學習條々」といふ書の中に「せぬところがおもしろき」といつてあります。つまり積極的な態と態のあひだが面白いといふのであります。即ち「このひまひまに心を捨てずして用心をもつ内心也。せぬにしてはあるべからず。無心の位にて我心をわれにもかくす安心にてせぬひまの前後をつなぐべし。是則ち萬能を一心にてつなぐ感力也」といひ之を操りの人形に譬へて、人形の動くのは糸の業であるが、その糸見物に見せないやうに、心を人にも自分にも見せずして萬能をつなぐべしと説いてあります。

この考へ方は前に述べた日本の弓術の教と符節を合せる如き考へ方で、何事でも形にあらはさな

ければ満足し得ない歐米人の考へ方とは全然ちがつた考へ方です。我々の祖先はこの考へ方をほんたうの考へ方と思つてゐたのであります。この古來の考へ方で、今の法律裁判をもう一度見直すべきだと思ふのであります。

此一節をわざわざこゝに寫したのは、三宅君は世阿彌の所論の中より花から法律へさらに弓道にまで持つて來てゐる。もとよりそれはあらゆる物にあてはめらる。釣も打球もそのたのしみはゆく先き先きでおもむきがかはる。同じ河筋でも打球場でも四季とりどりの風情により風に霜にその趣きがかはる朝と夕とで早やちがつてくる、そこに大きな魅力がある。おそらく華道とても同じ事なれば茶道とても同じ事である。互に招きつ招かれつ、四季により風情が變つてゆく、資力のない人でも器具調度のいつもかはらざるには興がさめる事とおもふ。資力豊なる人の道具に凝り出すに不思議は無い。況んやその道具は本人が見越すとか、わらふとかそれはどうでもよい、物の値が上らなくとも金の相場が下る一方だからいつの間にか値上りするに於ておやである。

ここに於て、茶道にも新體制もあつてよい。しかも、新にも舊にも眞行草とそれぞれの變化があつてよい。

第八篇 俳句と短歌

一、俳句のすがた

芭蕉は、

西行の歌における、雪舟の繪における、利休の茶における、その通ずるものは一なり。

といつてゐる。之には「わが俳句における」といふ八字もあるものと思つてよい、ひとしく和敬清寂を標語としてゐるものであらう。

俳句は和歌より連歌俳諧俳句と派生したものであるが、和歌の定型五七五七七に對し下の二句がなくなり、上の五七五だけになつてゐる。三十一文字ならばかなり情緒をつくしうべく、そこにテニオハもやかましくなつてゐるが、十七文字ではそんな事にかまつて居れない。

俳句はひとところの破綻はどうにも取りかへしがつかないといはれる。短歌よりも強く短く壓縮するのだから、五七五の各句が必ずしもつながつて居れない。

奈良七重七堂伽藍八重櫻

といふ句は凡てがちぎれちぎれであり、それが昔の奈良の景色を浮き出してゐる、高濱虚子翁は短歌の時間的推移を叙するに對し、空間的にむしる繪畫に近いものがあると言つてゐる。されば繪に

空白を存する叙法のある如く、多くの山水の畫などにあの舟がなくばあの家あの瀧がなくばと思はる如く十七字が猶餘りありて「ありにけり」とか「なかりけり」といふ一見閑文字をつかふ、恰かも「長々し夜を獨りかもねむ」といふ七七だけで足りてゐる。他のカヤクをゴテゴテ入れるかはりに只その長々しさを形容するにとどまる「足曳の山鳥の尾のしだり尾の」といふ上三句を使ふ、そうした全體のリズムを強めとなへるといふ事である。荻原井泉水翁の俳句への宣言の一は、

句には其人の相あるべし、これ面貌なり

句にはなごやかさあるべし、これ音聲なり

句にはあたゝかさあるべし、これ體溫なり

句にははりとながれあるべし、これ血行なり

まして句には眞實なかるべからず、これ魂なればなり。

といひ、宣言の二として、

俳句は矢なり

みじかき、一寸ちの、たわみなき矢なり

ますぐに、誤たず、ひたむきに射よ

但し、わが的ははりぬきの的にあらず
わが的は日なり、月なり、はた人の胸なる心臓なり。
といつてゐる。

二、俳句と和歌と漢詩

短歌なり俳句に自由律があるが、私見では短歌も俳句もいづれも又只眼で見ただけのものでない。口ずさみ之を聞く、そこに自からリズムがある、字足らずもある、字あまりもありうる、それが口にし耳にしてなめらかに調子よくは入ればよい。しかし自由律も段々定型からはなれてくると、それはそれでよいが、もはや短歌とか俳句とかいふものと別種のものになる。その間の區別境界が問題になる。自由律及び口語體、そうした問題を論じるのが主旨でないから只注意しておくにとどめる。

俳句は俗語もつかへる、簡明である平民文學であるといふ。しかし短歌とても俗語可なり漢語可なりである。ことに俳句には短歌より漢詩より入りやすい、子規は俳句が力を漢詩にかりしにも因るべきか、芭蕉は杜甫の詩をよみてその趣味を俳句にうつし、蕪村は詩の趣味と共に詩の言葉をも俳句に用ゐたりとて、數多くの漢詩を俳句に譯してある。私のやうな者は子規の「俳句と漢詩」の一文に心か

ら推服を禁じ能はない。ところで萬葉集にも俗語方言を用ひたるもの多く、漢語を直譯せるもの多く漢語そのままに用ゐたるもある。もとよりその型がちがひ長短の別があるから、それぞれに長所がある。子規は、

冠辭を措き對句を爲し、その他紆餘婉曲のところは和歌の長所であり、些少の事掌大の景之を簡勁なる文字につゞりて多少餘韻あらしむるは俳句の長所なり、然れども是只一點のみ。雄渾壯大なる處、秀麗閑雅なる處、蒼老樸茂なる處、平遠恬淡なる處和歌と俳句と總てその揆を一にす。

ここで漢詩につき言及すべきであるが、漢詩はその昔は我朝にありても支那におけるが如く音讀されたから押韻といふこともリズムの上から當然考へられる。しかるにその後韻はふむ、しかし音讀でなく之を譯していはゆる日本讀みをする、棒よみの韻でなく、霜は軍營に滿ちて秋氣清しとよむ。それならば韻をはなれて自由に日本讀みの調子に合ふやうにするとよいともいへるが、又それぞれ沿革傳統もある。いづれにしても中々むつかしい、入りにくいのでここに略する。

三、俳諧大要 上

子規は俳句に志す人の爲めに俳諧大要を筆にしてある。殆んどあげて之を短歌にも適用し、準用す

べきものである。子規は修學を三期に分ち、

利根ある學生俳句をものすること五千首に及ばず、直ちに第二期に入るべし、普通の人にも多少の學問ある者俳句をものすること一萬首以上に至らば必ず第二期に入り來らん。句數五千一萬の多きに至らずとも、才能ある人は數年の星霜を経る間には自然と發達して、何時の間にか第二期に入り居る事多し、蓋し自ら多くものせずとも、多年の間には他人の句を見、説を聞くこと多きがためなり。

といひ、第二期に在る者は俳家の列に入り、名を一世にあぐるが如き難からず、第三期は俳諧の大家たらんと欲する者のみ之に入ることを得べく、一世の名譽に區々たる者の如きは終に此期に入るを許さざるなりといつてある。乃ち第二期は天稟の文才ある者業餘を以て之を爲すべし、淺學なる者、懶惰なる者猶能く之を修むべし、知らず知らずの間に入り居る事あるべし、もしそれ第三期に至りては文學専門の人たるべく、勵精なる者篤學なる者たるべく、自ら入らんとする決心する者たるべく、卒業の期なし。入る事淺ければ百年の大家たるべく、入る事深ければ、萬世の大家たるべし、といつてある。

いはゆる修學第一期初學の人々に子規は數十條にわたり懇切に示してある、その中から特に數ヶ

條を摘録する。

- 一、俳句をものせんと思はば思ふまゝをものすべし、巧を求むるなかれ、拙を蔽ふなかれ、他人に耻かしかるなかれ。
- 二、俳句をものせんと思ひ立ちし瞬間に半句にても一句にても、ものしおくべし。初心の者は兎角に思ひつきたる趣向を十七字につゞり得ぬと思ひ棄つるぞ多き、太だ損なり。十七字にならねば十五字、十六字、十八字、十九字乃至二十二三字向一に差支なし。又みやびたるしやれたる言葉を知らずとして趣向を棄つるも誤れり。雅語、俗語、漢語佛語何にてもかまはず無理に一首の韻文となしおくべし。
- 三、俳句は殊に言語、文法、切字、假名遣など、一切なきものと心得て可なり知りたくば漸次に知りおくべし。

四、漢語と字あまり

子規の修學第一期の人々に與へたる前三條は、特に始めてその門に入る者には心得事であるので、少しく之に付言しておく。之は俳句にかぎらない。短歌に於ても又然りである。

最もよく聞く事はどうも近頃の歌はむつかしくて分らない、歌だかなんだか見わけがつかぬ。漢語もある俗語もある、西洋の語もある、馬鹿に字あまりになつたり、十七文字も三十一文字もめちやめちやだ、何をいふてゐるのか見當もつかぬなどといふ。數知れぬ中にはそういふのもあらうが、何より反問したいのは昔の歌は漢語もある俗語もある、字あまりなども少しも珍らしくない。何よりも昔の歌ならば分るといふのか、いかさま小倉百人一首の中には誰が見てもすぐわかるのもある、しかしあの中に分らないのがかなり多いのである。

來むといふも來ぬ時あるを來しと云ふを

來むと待たじ來じといふものを

之は萬葉のしかも女の歌人坂上郎女の歌である。

相思はぬ人を思ふは大寺の

餓鬼のしりへに額づく如し

此歌の調子のあらあらしさ、ましてその頃のみで支那から傳來したばかりの漢語である餓鬼といふ文字をつかつた放膽な歌は、これ又萬葉の同じく女の歌人である笠郎女である。字あまりが多い破格である歌やら句やら分らないといふが、

花散り月落ちて文こゝにあら有難や

立ち去る事一里眉毛に秋の峯寒し

夜桃林をいてて曉嵯峨の櫻人

心太さかしまに銀河三千尺

これは蕪村の句である。近くは虚子の句にも、

凡そ天下る去來ほどの小さき墓に詣でたり

といふ句もある。とても長い、それでよめば調子が整つてゐるのである。

これを短歌に見ても、故木下利玄の軍艦碇泊三首、それは天下泰平のころの歌であるが、

胴體を波に深くしづめ軍艦の

とりつくしまもなく横はりゐる

軍艦の八幡ゆるかぬ胴體を

ささなみうてり灣のしつけさ

近頃は天下泰平なれば軍艦も

この浦に來てどんたくをせり

といふがある。

何も定型を破れといふのではない、好んで漢語、俗語、新語をつかへといふのでは無い。定型にしばられねばならぬ。漢語、新語、俗語をつかつてはならぬと窮屈に考へるに及ばない、子規のいはゆる「思ひ立ちし瞬間に半句にても一句にてもものしおくべし」である。どんな語にてもよし「無理に一首の韻文となしおくべし」といふ事を裏書するにすぎない。

私の歌をはじめたのは大正の四年であつたが、當時臺灣にて守舊にとらはれた人たちは、私の蕃山といふのを見てうらやましい、私たちは醜のむら山とかいはねばならぬといむ、恒春といふ地名まで「ここはるの里」とかいはねばならぬといふ。汽車は「むしけ車」飛行機は「天の釣船」といつたが、汽笛を「むしけの笛」もおかしい、飛行船はどういふか。そうした窮屈さからだんだん離脱して来る、その中には口語體も出てくる、自由律も出てくる、みなそれぞれに百花咲き亂れてよい、とかく自らに専らにして、他をのぞかうとするところに病根があると思ふ。誰しもみなおのが畠に熱しすぎるのである。

五、俳諧の概要 下

子規の心得書きにつゞく。

四、俳句をものしたる時は其道の先輩に示して教を乞ふもよし。初心の者の耻かしがるは却つてわるし。初心の時の句は俗氣はなれてよろしく、少し巧になりし後は、なまなかに俗に陥る事多し。

五、自からものしたる句は、紙片に書き記しおくべし。時々くりかへして己の句を吟じ見るもよし、その間に前に言ひ得ざりし事を言ひ得るもあらん。又己の進歩を知るたよりともなりて、一はひとり面白く、一は更に一段の進歩を促す事あるべし。

六、古人の俳句をよめば己の句にくらべてその意匠慘澹たる所を發見せん、他人の名句をよみて後自ら句をものする時は、趣向流出し句調自在になりて、名人の己に乗りうつりたらんが如き感あるべし。

七、古句を半分位ぬすみ用ふるとも、半分だけ新しくば苦しからず。時には古句中の好材料を取り來りて自家の用に供すべし、或は古句の調に擬して調子の變化をさとるべし。

八、なまじいに他人の句を二三句許り見聞きたる時は外に趣向なき心地す。十句二十句百句と多く見聞く時は、却て無數の趣向を得べし。

九、一題百句などのせんとする時は、始めの四五句を得るに非常の苦吟を感ずべし。その後は稍容易にもしのいで、二三十句に達したる後には、百句立どころに辨すべく、數百句位は出來べき心地すべし。

十、一時間に數十百句をものするもよし。數日を費して一句を推敲するもよし、早くものすれば放膽の方に養ふところあり苦しみてものすれば小心の方に得るところあり。

くりかへしていふが上記せるは俳句手ほどの一部にすぎない。しかしこれはすべての趣味いやあらゆる我等の常住坐臥によき心得事と思ふ。もしそれ此道に入りて飄々と獨り煙霞に放浪するも可なり。近頃のはやりの吟行を共にするも又可。趣味には同好の友垣のむすべる事が又、大きな收穫であらねばならぬ。さらに俳句の妙その功德に至りては、次に歌道に筆にせるところと又相通するものと知るべきである。

六、眞劍味と季感

日野草城子の俳句入門者への言葉に、

諸君は專業の俳人でない。諸君はそれぞれ職業を持つてゐて衣食の途にいそしむかたはら、餘技

として俳句をつくられるのである。しから餘技だからといつて、俳句に對する關心が眞劍でなく習練の心を忘れ、遊戯視してはならぬ。餘技とは職業でないといふだけである。人生にとつて衣食の方便である職業よりも、餘技の方が意味を持ち價値が高いといふ事は往々にある。諸君は俳句をつくる事を消閑の具と考へてはならない。碁を圍み、球を撞き、麻雀を遊ぶことと同じやうな單なる娛樂と考へるなら、それは言語同斷の話である。(中略)作品の巧拙は措き、その作品活動の目的に對する正しい認識と動機純粹性が、何よりも先づ要求される、作品の出來榮の如きは寧ろ一つの結果に過ぎない。(下略)

この草城子の俳句入門者への言葉の中に餘技といふ語にすらも一つ趣味といふことにびつたりしない感じを持つ者であるが、さらに碁を圍む事などは消閑の具である、單なる娛樂であるに對して、私はやはり同じく眞劍であれ、習練の心を忘れず遊戯視しないことを要求してゐるので、心を換へると俳句に對しても同じ事をおうむ返しにいふ事とおもふ。

そうした事は諸人濟度の宗教でも、佛教基督教回教等々互に相容れず、同じ佛教でも十餘の各宗派相對峙し、同じ眞宗も東西に分かれ、その東なり西なりの間に又相争ふのであるから、草城子のことばをとりたてゝその詞のはしをかれこれいふのではない。その門に入る者への言葉は、よく我等の思

ふ事をいひつくしてある、全くその感を同じくするから、ここに他の趣味へ志す人へよき心得事と思ふから摘録したのである。

もしそれ俳句の季感については、その道の中にも議論が多くこゝにつくすべきもない。しかしいづれにしても我等は句をつくれればよい、恐らく百中九十九まで季にふれざるものはなからう。しかしそれが句として誦するに足れば、たまたま季感なしとてすつるにも當らぬと思ふ。これからは北滿蒙古から南方一帯へかけて氣候風土もかなりにへだたつてくる。おのづからそこに世と共に移るものがあるうと思ふ。虚子翁は古壺は古壺たるべし、之に新酒を盛れといふ、草城子はおやこの句に季が無いぞと氣の付いた「祇王寺の留守の扉や押せばあく虚子」の境地こそ本當のものだといふ。

此句が季に入らぬものか、どこかの季に入れうるものか、この程永田青嵐氏も南洋で句をよんで自からおや季は無いぞといつたとかいふ新聞記事があつた。おそらくそうした場合も起つて來やう。どうも百中九十九までつくつて見ると季がある。だから俳句に季あるべしといふ、いや百中一でも無季あるからは季感はずてしまへといふ、いや千中九百九十九だ千中一だ、その邊に無季の問題は無期になり、ムキになつて論じられてるやうに我等には見える。

七、病める節と子規

人間は病の器である、老幼男女の別なく、いかに平素は健康であらうとも、無病息災を以て誇つても、いつ病になるか分らない、いつ怪我するか分らない。人生無常おのが身に、一家に友人に、數へきれぬ悩みもおこる。そうした時に不平となり愚痴となり、怒りつぼく氣短かく、いらいらと心の平靜を失ふ事は、本人としても望ましくなく、そばの人たちには迷惑千萬である。だからそうした場合の氣分のゆとり落付き、平靜をうるための趣味には碁、將棋、カルタ、トランプ、麻雀などもやつて見やうといふ氣が浮かない。又できなくなる事もある。又出來ても勝負事であるだけに却て頭をつかひすぎてよくない、却て氣分をいらだてる事にもなる。

そうした時に先づ考へられる事は讀書であるが、これも氣分のわるい時は堅苦しいものはさげねばならぬ。新聞、雜誌類とか小説隨筆ものにしても、猶警戒によりとめられる事がある。事實健康な時でも、あまりこつて讀みつづけるとかなりくたびれる。小説にしてが讀みはじめるとしまひまで讀んで見たくなる、度をすごすといふ事になる。かかる場合に短歌と俳句がある。

土の歌人長塚節は長らく肺を病んだが「鉞の如く」抄の歌をよんだ人は、いかにその歌が鉞の如く

鋭く冴えてゐるか、又そうした作歌に心身の煩悶からなにかしらの慰安といふか、心やりといふか、
 氣を紛らすといふか、心氣の轉換したかといふ事が想像される。いかにも彼は三十三歳にして喉頭結
 核と診断され、餘命一年を保つにすぎぬと宣言されて、

生も死も天のまにまに平らけく

思ひたりしは常の時なりき

わが命惜しと悲しと云はまくを

耻ぢて思ひしはみなむかしなり

知らなくてありなんものを一夜ゆゑ

こころは今ほきのふにも似す

すこやかにありける人は心強し

病みつゝあれば我は泣きけり

とよんでる。ここで萬人はただあけくれ泣いてゐる。長塚節は之を我は泣きけり、とうたつて自か
 らすくはれてゐたのである。

正岡子規の病は脊より腹に巻きしものと臂を掩ひて足につなぎしものと二つの縲帯に巻かれてゐた

が、綿にてやはらかに拭ふすらも痛みに堪えがたく、覺えず死聲を出して叫ぶなりと手記してある。
 煩悶と題せる一文の首文は、

時は午後八時頃、體温は卅八度五分位、腹も脊も臂もみな痛む。

アツ苦しいナ、痛いナ、ア〜人馬鹿にしてゐるぢやないか、馬鹿、畜生、アツ痛、アツ痛イ
 痛イ、寢返へりしても痛いどころか、ぢつとしてゐても痛いや。

とある。つまり我病を客觀視して痛いな痛いなと筆にするところに氣分の轉換があり、緩和があるの
 である。「病牀六尺」に寸時も看病人を病床よりはなれしめない、早く言ふ通りしないと腹が立つ、
 面會する人に好き嫌ひがひどくなる、そのわがまゝになり、氣むづかしくなれる事を叙してあるが、
 この苦しみ痛さは、一度死んだ人か若くは、死際にある人でなければわからぬと病める黒田如水や、
 陸奥宗光まで引き合に出してゐるのを見ると、子規はひどい難病にかゝつたものである。しかしそれ
 らの病狀を長々と「病牀六尺」に筆にする、又その間に歌、俳句をよみでてゐる。その作品がいかに
 すぐれたものであつたか。それを思へば子規は歌と俳句にいかにか救はれた事か、今さらに趣味の功德
 の廣大なるに驚く外はない。

八、病める島田尺草

さらに入念なる例をひけば瀨の歌人がある、島田尺草と明石海人は、それらの数多い歌人の代表者である。島田尺草の歌に、

梅の香をしづめて降れる雨脚の

ほそほそとして春めくおぼゆ

松の葉の露とけそめて雫く音

今朝はゆるかに吾が眼ざめたる

この春は見る眼はなけれ櫻散る

夕べをひとり門までは來つ

ふきかへぬ屋根の瓦の苔むして

ちちのみの父は老いましにけむ

などあるが、これらの歌はどうしてよまれたとおもふ??

萬葉時代から數十萬人の歌人が生れたであらうが恐らく島田君程苦しみ、殊に萬人の経験し得な

い肉體的苦しみに堪へて歌を作つてゐる人は無い。眼は四年前より失明し、喉頭は三年前より切開して金屬製の管を通して呼吸してゐるので殆ど聲が出ず、おまけに此の呼吸管が屢々塞がつて息の絶える様な苦をする事がある。又癩性浸潤の爲に皮膚の感覚が麻痺して物に觸つても充分解らない。又顔や手足に潰瘍がしばしば出来てゐて、膏藥と繃帯とで覆はれてゐる。君が歌を發表する時はベツトの白布の上に指で字の形を示すか、或は喉頭の調子の良い時には、息の漏るる呼吸管に指を當てて之を塞ぎ、少しばかり口の方から空氣を出して、かすかに音となる聲で、字意を傳へてゐる。かかる苦しき作歌は凡人には想像だもできない。しかしそれだけに歌によりて病苦が救はれてゐたのである。尺草は、

この私の十三年間の療養生活に希望を失はせ無かつたのは、全く歌の道でありました。噫私は癩者と生れたるを怨まず、本書を抱いて永遠の旅路に上る日を安らかに靜かに待ちたいと思ひます。

といつてゐる。同じ病める人明石海人の歌には病名を癩と聞きて、

九、病める明石海人

看護婦のなぐさめ言も聞きあへぬ

いかりにも似るこのわびしさを

診断を今はうたがはず春まひる

癩かたに墮おちし身の影をぞ踏む

妻は母に母は父に言ふわが病

ふすまへだてゝその聲を聞く

咳せきくは父が聲なりかかるさへ

限りある夜のわが家にふかむ

幾たびを術すべなき便りはものすらむ

今日を別れの妻が手とるも

などがあるが、海人はその歌集の巻頭に次の如くしてある。

癩は天刑である。

加はる筈しもとの一つ一つに、嗚咽し慟哭し或は呻吟しながら、私は苦患の闇をかきかぐつて一縷の光

を渴あき、求めた——深海に生きる魚族のやうに、自らが燃えなければ何處にも光はない——さう

感じ得たのは病が既に膏盲に入つてからであつた。齡三十を超えて、短歌を學び、あらためて己れを見、人を見、山川草木を見るに及んで、己が棲む大地の如何に美しく、また嚴しいかを身を感じ、積年の苦澁をその一首一首に放射して、時には流涕し時には抃舞しながら、肉身に生きる己れを祝福した。人の世を脱れて人の世を知り、骨肉とはなれて愛を信じ、明を失つては内にひらく青山白雲をも見た。癩はまた天啓でもあつた。

この上重ねて筆にするにも及ばない。難病に苦しむ人天刑病といはるゝ業病に悩む人すらも、歌にすくはれるのである。しかし、歌はなにもそうした人間苦に喘へぐ時ばかりではない。ただそうした時すらもといふのである。

十、歌の九徳、上、歌を見る

私は齡四十のころ入院中の徒然より歌の道に入り、今日まで春風秋雨歌悦の恵みに浸りつづけてゐる。ここに私の歌集の巻頭に筆にせる「歌の九徳」及び「歌悦」を抄録し、終りに昨十六年權太の客旅に病みし折、又その後引つゞきいかに歌悦に恵まれてゐるか、權太生死吟を摘録し参考の一端に資する事とする。生死吟は稚拙なものであるが、その中に平時における觀光吟あり、時局に對する危言

あり、くさくさの吟詠あるは、あらゆる耳目にうつるもの、あらゆる胸裡に感ずるもの、みな歌によ
みいでうるといふためしを示したいからである。

歌の本を讀む效能は九つある、其一は『理窟なし』といふ事である、歌の本を見るのと比較したな
らば歌の本はたしかに理窟はない、たゞ思ひ浮びし感じをすらすらと現はして居る。其二は『六つか
しくない』といふ事である。お経などは難かしい方で、昔は判らないので有難く思つたが、今は判ら
なくては有難くない。其三は『固くない』といふ事である。バイブルは、お経よりはすつと柔らかい
が、歌の柔さにはくらぶべくもない。其四は『暗くない』私共は絶えず新聞を明るくしたいと云つて
居るが、新聞記事を見て居ると中には何人斬りだとか首縊りとか、入水とか汽車往生とか、猫いらす
とか、貫子殺しとか少女凌辱とか、使ひ込みだとか横領だとか、怪文書とか收賄とか、讀んで苦々し
いやな事が多い、私共は此の如き食慾を減ずる記事を讀んで暗い氣持になる、もとより歌にもさう
云ふ事を諷して詠むこともあらうが、歌そのものは常に明るい、暗くない。

以上は歌の内容に屬する方である。次に其五は『可分』といふ事である、本を讀むときは或段切り
まで讀み続けねばならぬ、講談や小説でも仇を討つか討たぬか、才人佳人が添ひとげるかどうか、兎
に角はじめからしまひまで讀み切らねば判らぬ、歌は三十一文字で、歌集はどの頁を開けて見ても一

首づゝそれぞれ獨立性をもつてゐる。どこから初めてもどこで打ち切つてもよい。其六は『運び易い』
といふ事である。カバン、サツクはもとよりポケットに入れうる程度のもものが歌集にはふさはしい、
隨時隨所で見ることの出来るのが歌集の特色である。其七は『時を選ばぬ』といふ事である。散策し
ながら讀んでもいい、汽車電車の中でも、訪問して待たされて居る時も、停車場で待合はす間も、ど
んなあわただしい時でも又退屈な時でも、歌集を讀んで居ると氣持が柔らぎなごんでくる。其八は、
『味がある』といふ事である、僅か三十一文字に押しつめてあるのだから、小説や論説や普通の新聞
記事とは違ふ、リズムにあはせ短かい詞に結晶したものである、それだけに一行二行の僅な文句に盡
きざる味がある、熟讀翫味噛みしめるほど、滋味がでてくる。其九は『長命』といふ事である。誰の
小説が非常に面白い誰の本は非常に旨いと云つても、其小説を二度も三度も四度も繰返して讀むかと
いへば、それは稀れである、併し萬葉でも古今でも、近くは子規や啄木利玄などの歌集でも、一度讀
んだくけでもうよいかと云ふとさうでない、一生吾々が書架にそなへカバンに入れ、くりかへし愛讀
翫味されるのである。

十一、歌の九徳、中

ところが歌を讀んで居ると、何時の間にか讀むだけでは面白くない、自から詠んで見たいと云ふ氣になる、芝居が面白いからといつて舞臺に立ちやる氣にはならない、漢詩にしても韻を踏む爲めに少からず骨が折れる、歌になると假名を三十一文字ならべるのだから入り易い。人の歌を讀んで見ると存外つまらぬ有りふれたものである、わけがなさうである、こんなものなら俺にも出来ると思ふ、そこで足を踏み入れて見るとさうらしくでない、それだけに歌の旨味が判つてくる、判れば判る程面白くなつて来る、理窟を離れ固くなく、暗くなく明るい氣分で歌を詠まふと云ふ、春の様な暖かなうららかな柔らかな氣持になるところが生命である。歌の上手下手出来不出来は問ふべきでない。歌は時にはトントン拍子でつくれる事もある、併し想だけは出来たが、それをまとめあげるために半月も一月も持ち越しとなり、汽車電車の中でも考へをつづける、夜寝につくまへにも考へて居る、何時まで行つても纏らぬ事がある、古への歌人にも人によると定まつた場所に坐つて、香でもたいて静かな或形をとらぬと出来ない人がある、又西行法師の様に歩いて居らぬと考が出ない人がある、西行法師が時の帝のお召によつて或時歌を作つたが、出来が悪い、傍の人が西行は歩かねば歌が出来ませぬと申上げたので、其次には歩いて作れとお言葉があり、今度は庭をひとり歩行しながら詠んだら名歌が出来たと云ふ話もある。人々それぞれに癖がある、眞逆人と議論してゐては歌も考へられぬが、汽車電

車の中でも、肚の中で考へる、論をうなつたりするのでないから他人の邪魔にならぬ、私共が會議をしたり傍聴したりしてゐる時でも、下手に口を出してはいかぬ、又進んで口を出すべからざる時などは、歌を考へて居る事がある、ぢれずに辛抱して居られる、殊に汽車電車の中で退屈な時とか待ち合わせる時などには消閑方法として心の平靜を保つ爲め妙である、或夏松阪の夏季講習會に招かれた時に龜山と一身田の間に水が出て龜山で汽車が止まつた、皆時計を出してブツブツ云つて居るが、私はアサヒ・グラフの原稿を書きはじめた、暗くなつて来た、靜かに歌を考へはじめ、二三時間立往生したが、その間少しの退屈も覚えなかつた。私は停車のため時を有利に使はれたので、夜二三時間早く着いて宴會で獻酬を重ねるよりも、却つて有意義であつたと思ふ。

歌を考へる時は、暗からうが、揺れておやうが、歩いてゐる時でも、横になつてゐる時でも、一切自由無碍である、考が纏らずにウツラウツラ眠れば眠つてよろしい、私は毎年一二冊の隨筆集を公けにしてゐるが、その中に數知れぬ歌が織りこまれてゐる、多くは旅行中詠んだもので、その多くは汽車中で作つたものである。東京發九時頃夜行の汽車に乗ると、米原大津間は勾配もカーブも少ない。筆を執るに妙である、さう云ふ時に書いてもよし、讀んでもよし、眠つてもよし、歌を考へてもよいのである。

十二、歌の九徳、下、作歌の悦び

歌を作ると新に「歌の友達が出来る」これは又何とも云へぬ味がある、竹馬の友にも味はあるが、だんだん病氣などで落伍して行く、其失はれて行く隙間を埋めて行く中に歌の友がある。歌の友達は其人柄に安心といふ信用状が附いて居る様なもので、氣を許してのんびりと話しが出来る。米國に渡つた時桑港、ロスアンゼルスに到る所で未知の歌友達のまどゐに招かれた。内地でもあちこち旅をすると、幾多の歌の友達にめぐりあふ。尊く又楽しきかぎりである。

さらに筆の便りをする時など、くだらなく長々しく仰山に紋切型に書きつけるより、歌にかぎらない、詩、歌、俳句にてもよろしい。簡にして言外に味をのこして趣きが深くなる。例へば御役人に折身邊の異動がある、さういふ時に、君よしたさうだが、まあ養生したまへと云つていいのか、更らに捲土重來し給へといふのがいゝのか、榮轉の時は御榮轉を祝すと云つてよろしいが、やめられた時には御退官を悲しむと云ふのも變でない、さう云ふ時には歌など書く、なんとなく奥床しい。私が臺灣で官を退きし時も、足かけ七年随分長く在職して居つたから、方々から手紙や、電報で澤山な挨拶が來る、これに對して小生在官中はとか、此度退官の恩命を拜しなどと、版に捺した様な月並の決り文句

も感心せぬ、これには深き仔細のある事とか、云ふに云はれぬ譯あつたと云ふのをかしい、そこで

私は臺灣を去る時に數多くよみいでし歌の中から、

このあさけ天地の中にたたひひとり

立ちし姿をわれと吾見たり

七とせは夢かあらずか芭蕉葉の

葉すれの音のさやさやと鳴る

の二首のいづれかを門司に着くまで船の中で皆自筆で差出したが、それは時の節約ともなり、又思出としても普通の手紙などより、何んとなく風懐の深きものがあつたのである。

作歌は以上あげたる效能特色があるため、自然其の九徳として所謂長命である、つたない歌でも集めておく、都合により印刷に附して置く、骨董品を残しておくとし孫は賣立てに出す、歌集はいついつまでものこされる、そこに藝術と金の違ひがある。

六甲苦樂園に病氣を養つて居た友人がある、見舞に行つて見ると、籐椅子によりかかつてお經の和讃の様な本を見て居る、人間病氣となると生死の問題にふれる、それが縁になつてバイブルとかお經を讀んで見様と云ふ氣になる、併しお經を讀むのは難かしくもあり、理窟もはいるからかなり頭を痛め

る、そこで佐々木博士の和歌入門と云ふ本を持つて行つて、何でもいゝから歌を作つて見給へ、何でもいいから文字をならべて見給へとすすめて見た、ところが友人はさう云ふ方の趣味の浅い人であつたが、病氣の際であるから氣も紛れやうと、そろそろよみ出して見る。次で毎日二首三首位作つて來る、今まで寢附が悪くて苦しんだものだが、歌を考へてみると非常に樂になると喜んで居る、散歩の時もいやな事を考へたものだが、歩きながらあの景色を歌つて見やう、此感じを詠んで見やうと思へば、それに氣が紛れて非常に樂になつて來たと云つて居る、私はいつも病にかかると、大に歌により救はれたが、病める友人も歌に救はれたのである。

人間は自分の心に痛める所あり、自分の身體に病める所があれば、其時に自分の心自分の體を客觀視してうたふ。そこに心の安定がある悟りもあらう。尤も専門家とか玄人になると選歌もせねばならぬ、本も作らねばならぬ、常住坐臥研究をつづけておなければならぬが、それは我々素人の境遇ではない、吾々は唯よしあしに拘らず、歌を作るといふ氣持があつて欲しい、歌は人間の氣の滅入つた時ばかりでない、人間は得意の時にも歌を詠むだけのゆとりがほしい。人間にはさうした自省と餘裕がなければならぬ。

十三、歌悦上、歌をよむ機縁

この一文は直木倫太郎君歌悦に入りし消息である。君は東京帝大工科の逸材にして筆者と古い古い友である。前に大阪市都市計畫部長兼港灣部長たり、次で内務省復興局長官たり、退官して後滿洲國の土木技監として吉林の水電事業をはじめ畫策せられしもの少くない。現に滿洲國參議として、その材幹その風格朝野崇敬の的になつてゐる。此一文は、君復興局退官後同局に不祥なる疑獄を見る事となりし當時にかかつてゐる。

大正十四年の暮、筆者は新聞の實生活を歌ふた作品をまとめて上梓し、『新聞に入りて』と題してこれを公けにし、その一本を直木燕洋君に贈つたが、世が世なれば君は復興局長官として、押しつまつた心忙しい年の暮に、まあ贈つた小包の包紙は解きもしたらうが、せいぜい目次を一通り見るくらいで、そのままかへり見られない運命を持つてゐたのであらうが、次に披露した君の書信中にある如く君は公職を退きて閑散の身となりし上に、舊部下より續出せる疑獄の暗雲に取まかれ、極めて不愉快な冬籠りの座右に出くはしたため、一躍して君を歌悦に導く結縁の千萬無量の功德を見しことは、拙著の中に散らばりし短歌の光榮もさることながら、一度君の臍の緒切つてはじめて作りたりといふ歌

を見ては、そぞろに驚嘆を禁ずる能はず、佐佐木信綱先生と打合せの末、竹柏園の會合となつたのである。

ここに君の書翰を轉載するのは、もとより君の歌の最初の試みそのものを紹介するといふ外に、一つは直接間接に君を知れる公私の知人に、博士が現時の境地を披露して見たく、一つは歌悦といふことにふさはしき心強き實例の生み出たことを、歌に結縁ある人にも、またなき人にも、知つて貰ひ度いからである。

長たらしき前置よりも、ここに燕洋君が筆者にあてた大正十五年一月十四日付の書翰を披露する。

十四、歌悦中、直木燕洋君の歌

(前略) 舊臘は新著『新聞に入りて』を御惠贈下され、早速御禮申上候べきを、彼是取紛れ遂に今日に及び申候儀、一に御海容願ひ上げ候。御承知の通り、小生も舊秋漸く彼の面倒極まる復興局の仕事より逃げ出すを得候より、むしろひそかに大喜びにて、これぞ一世一代の夏休みと心得當分は保養がてらの旅行に、あくまで氣樂振りを發揮致すべくと浮立ち申しをり候折柄、はからずも舊部下より意外の大失態を生じ、何やらそのため小生までも世間からは同「疑雲」に取巻かれ

たるかの感之あり、馬鹿臭き限りながら寔に餘儀なきハメにて、人生の災厄はどこに潜めるとも得わかぬ次第、當分は謹慎して事態の判明するを待つに如かずと、折からの冬籠を覺悟致をり候場合、はからずも貴著に接するを得この上の喜びは候はず、非常の興味を以て拜讀措かざる次第に御座候。

しかして、同時に御書に教へられて、小生もこの稀有の機會においてこそ、曾て思ひも及ばざりし和歌の道を踏み分け、雅兄のいはゆる『歌悦』に浸ることによりて、現下の馬鹿氣たる不愉快さから放たればやと頓に心の動くもの有之、いまだ如何にして、歌を學ぶべきかをも辨へず候へ共、もしこの機において多少とも歌を理解し得ること、相成り候はゞ、貴著に本づくこの結縁の功德こそ、實に千萬無量なるべく候。

(中略) 先づ手當り次第に日一日と歌の道へ近より申し居り候。茲に先づ小生が『言海』で知り得た全知識を利用して、小生としての最初の試みの和歌を御目にかけて申すべく候。

たばせつる書讀みにつつうつらうつら

海南莊のあるじしのばゆ

いみじくもかゞよふ海の氣をうけて

生れにし君ぞ歌のあかるさ

はしけやしやせこけ法師君にして

北し南しいや生き生ける

生き生くる日毎に心たらへばぞ

詠まるゝ歌のこゝだあかるき

たまきはるこの世のかぎりこゝしきに

あかるき歌ぞ高鳴らすべき

歌日記くりひろぐれば西東

吾もつらるゝ旅心地かな

海南のあかるき歌を讀みしより

怪しうも歌に心よるかな

見聞くもの思ふものなべて君は歌の

吾はうま酒のたどきとすらむが

歌の才我にあらずと思へれど

うたにぞこめむわが眞心を

海南 莊

往かへり武庫の山見は思ひよせむ

小松がなかの歌足らふ庭

十五、歌悦下、歌にすくはれる者

ほぞの緒切つて以來の始めての仕事御笑草と存じ候が、同時に小生の切なる願ひを容れ、適當なる師につき歌の道に進むべき順序と方法とを、何卒この絶好の機會において適當にお授け下されたく祈上候。

如何の歌書を讀むべきか

如何の順序によるべきか

何の先生に、または方法にて教へらるべきか

實は小生多年俳句の方に興味を持ち居候ところ、今度東北に九州に、四國に旅行して痛切に感じ

候ことは、俳句はとても旅日記の用には立ち申さず候。即景即目、みな句になり候ても、陳々相寄るの類にて、自慢らしき句は滅多に出来申さず、従つて九十日の旅行に、僅に十句しか會心の句はこれなく、これでは旅行そのものに對して相濟まず候。蓋し十七字では、應用の範圍が餘りに窮屈のやうにて候。

自分の生活の記録としての文藝の興味は、も少し自由なものがほしく候。しかく感じつゝありしところへ、あたかも貴著により、その東西南北の旅行に、悉く強き印象を録せられたる記念の和歌を見て、如何にもこれだと、とみにうれしく覺え申し候次第に候。旅行を楽しむこと最も多き小生にとりて和歌を知らざりしことが、随分損なやうな氣に相成申し候。

最近小生の學友ども、鐵道協會にて俳句の稽古を始めたしとて、小生に先生を推薦せよと申しをり候が、小生は右の理由によりて、俳句の代りに和歌をやるべしと力説いたし（中略）小生はその人達に、逸早く『新聞に入りて』をまづ見て、如何に和歌の自由な、氣樂な、あかるい、そして誰もの個性を發揮するによろしい、旅また旅の技術家に最もふさはしい感激と悅樂であるかを悟るがよろしいと、大いに宣傳鼓吹しつゝあることに御座候（下略）頓首

酒たらひ我がこひころぶ枕べに

神の子の來てつらなり舞ふも

歌悅については、大正十四年の秋大阪朝日新聞社の文藝講演會席上にて、『歌の九徳』と題して述べ、さらに之を筆にしてある。もともと短歌と俳句とは相似たるものがある。いづれを是としいづれを非とすべきでない。たゞ人間といふものは、ソロバンや帳面ばかりに拘つてはをられぬ、物質界の外に思想界がある、我等は恰かも碁と將棋のその如く、長唄、清元、常盤津、義太夫のその如く、歌かるたとトランプの如く、琴と三味線の如く、ピアノとヴァイオリンの如く、はた書と畫の如く、みなそれぞれの特異性がある。喰はず嫌ひであつてはならず、又喰つても己れの好悪を以て他人を律すべきでない。それぞれに興味によりて心のゆとりと安定を得てほしい。法悅もよい。歌悅もよい。

直木燕洋君の如く、始めて前にしるせるが如き堂に入りし歌をよみいであるといふ事は、萬人にのぞみ得ぬ事である。こうした一文を紹介する事は廣くこの道に新に入らんとする者をして、遲疑逡巡足踏みをせしめる事となるかも知れない。君は古くから虚子、碧梧桐、繞石、四方太の諸子と子規庵に足を運びし俳界の大先輩であつて、くどいやうであるが、その門に入れば一步一步と足を運ぶまでである。はじめからモノになるならぬ、そんな事は問題でないのである。

生死百首上

七月三日東京發翌夜小樽出港一路北千島に向ふ。十四日根室に上陸阿寒に三泊、十九日札幌に入り二十五日樺太に渡る。札幌以來講演を續行し、二十九日は東海岸敷香より山道三十里西海岸惠須取に着後過勞の爲め發病、王子俱樂部に靜養をつづく。十二分の手當をうけ逐日快方に赴く、八月十三日發小樽へ直航、十七日歸京帝大醫院に入る。經過引きつゞき良好、兩三日中に退院のはず。

病は反省と休養を與ふ。病臥中執筆を控へしたため、四六時中浮びくる雜感は、スフ入りの歌又歌らしくなき歌となり、二十五日三百首に及ぶ。その中より十一目百首をぬきいで「生死百首」と題す。その名仰々しけれど、病床中の歌日記にすぎない。であり、又私が歌によりて救はれる感激の日記でもある。

第一、樺太に入る 六首のうち

風待ちにいく日へにけむ奥蝦夷の宗谷の海を夢の間に我は
アイヌらと間官先生が獨木舟を引き上げ越せし砂山はこれか
銅像も碑石も見えねど樺太の土を踏む者は先生をしのべ

第二、樺太風物 九首のうち

樺太の八月の野を黄にそめて菜の花咲けり尺に足らねど
雜草を目の下にして咲きほこるほしいまゝなる蝦夷入の姿
火に焼かれ蟲にくはれて立枯れし白骨の林を旅ゆく今日も
鮭に似た樺太の島は眞二つに切られてあるも北緯五十度
人間のきづきし關はいかにもあれ水は流れゆく何んのかゝはりなく
幌内の川をせばめて上り下る船の動きをいつ見るらんか

第三、狭心症發作 十四首のうち

樺太の國境に近き町に來て言上げもせで我病みにけり
今更に覺悟をするもせぬもなしなるがまゝにとあきらめる心
助からぬものときまれば壇上に言上げしつゝ息絶えんものを
此期に及びいひのこす言はたゞ一つ惠須取の地に分骨せよと
我命とり止められし氣配なり衣すれの音のやゝにしづけき
部屋ぬちに立ちこめし人の息づまれる空氣は次第にほぐれるらしき

第四、直後感 六首のうち

世界地圖の色染分けのすむまではかにかくに我死なすにあらなん
壇上に言上げしつゝ息絶えしと心足らひつゝ夢さめにけり
積みかさねし雑誌の上におかれたるコップに投げさしの柳蘭の花

第五、年寄の冷や水 九首略

第六、富 籤 十首略

第七、生死観 十二首のうち

限りあれどいつとはわかぬ玉の緒のわかぬをたのみ夢とくらしつ
老いのびて朽木の如くたふるゝを安らげき死とのみ我は思はわ
爆撃に微塵となりてけし飛ぶも安らげき死の一つのさまぞ
ぢり／＼とむしばむ痛に悩む人そをみとる家族の苦しみを思へ
思ふまゝに手足動かす口きけず中氣にやめる姿はいかに
觀じ來れば死生天にあり死に處する我心をたゞ安らげくこそ
枕かへせばガラス戸すきて庭のおもに七かまどの青葉ゆらげるが見ゆ

八月のみどりふかます庭のへに一ところ白くクローバーの花

第八、遺言 十二首のうち

のこすべき代なしといふ借りあらば猶書きのこせ濟すべき道を
頼一つ軸物一つも我友へとかきのこしたし感謝のかたみに
日本人は死を恐れずといふしかはあれど死を忌む人のなどて多かる
遺言は無病息災の秘訣なり心安ければ病に遠し

第九、惠須取をあとに 九首のうち

樺太の惠須取の町は忘れぬ名となりけり惠須取の町は

第十、小樽にかへる 七首のうち

時いよゝしげき時なりながらへて乏しくもあれ力のかぎり
日の恩や山河草木よみがへる數ならねどもその一人なる我

第十一、東京へ 六首のうち

もたれなくもよい氣はすれどもたれよと云はるゝまゝにもたれて行くも
はじめの暑き日と聞く御民われ五穀成就をいのりてかへる

第九篇
旅

一、旅は苦樂を兩翼とす

人の一生は重荷を負ふて遠き道を行くが如し、いそぐべからず

之は誰も知る徳川家康の遺訓のはじめの詞である、芭蕉の行脚掟にいへる

夕をおもひ旦あしたをおもふべし

といへると同じ意味である。芭蕉は一生を漂泊の旅に終つた、恐らく多くの世の中の悩みも悶へもあつたであらう、江戸時代の階級意識そうした世界から一見地を開くべく、自己鍛錬の一つの精進でもあつたであらう。芭蕉は次のやうな話をしてゐる。

旅行をしない人は、自分のやうにいつも旅をしてゐる者を、さぞ楽しい事だらうと云ふのだが、旅は楽しみよりも苦しみの方が多い、だが一日歩きつめて疲れ果て、漸くに宿を得た時のホツとした氣持それが春の夕の繪のやうな風景であつて、ふつと一句が胸に浮んだ時などは實に楽しいとも云へる。行脚は苦と樂とを其兩翼とするものだ。

これがくりかへしいつてゐる趣味の誠の味であつて、その苦しみが楽しみである、近頃遠く中部の山岳地帯でなくとも丹澤山や谷川岳でも登山者がよく傷つきよく命をおとしてゐる。登山はらくでな

い苦しい、その苦しみを苦しみ通して山の絶頂を極める。絶頂に立つた時の快感はその登山が苦しいほど大きいものといはねばならぬ。そこに旅の趣味として大きな意義がある

自動車から汽車、汽車から自動車、大勢にとりまかれての旅はここにいふ旅でない。それが大きな街の只中でもよい、あわただしき世相をながめてゆくそれもよい。要はおのれが無念無想しづかな心持ちでながめられねばならぬ。もしそれ山に野に獨り煙霞放浪する。それは旅の極致であらう。われらは青年の頃から好んで苦しい旅を求めたものである。木賃旅行を、獨りの旅をえり好んだものである。ここに他愛のないまづしい私の旅のスケッチをうつして見る。

二、旅の思ひ出

明治二十年代の第一高等、中學今の一高生活こそ私共の五體をきたへあげてくれたものと、いまだに感謝してゐる。木下廣次校長は國家主義の下に質實剛健な一中健兒をつくるべく指導してくれた。

柔道、ボート、野球に手をふれた。徳風會に禪の講義を聞いた。無錢旅行、木賃旅行、野宿旅行をはじめたも此時であつた。

まづ鎌倉へ獨り旅をした。なんだ鎌倉へと笑ふなかれ、横濱からテクテクわらじがけである。横濱

から杉田、金澤を経て鎌倉へは入った。雪の下の鳥居前に泊つた、名も角屋といった旅宿も今はなくなつてゐる。八幡宮の寶物陳列場に源頼朝公七歳の時のおんしやりこうべといふ珍品もまだ聲高々と聞かれたのであつた。

富士登山は須走口にとつたが、アレキサンダーは一つ道をとらなかつた事に感嘆してわた僕は、鐵道通じて今は慶道となり、誰も試みない須山口へと下つた、裾野で日がくれ一と夜を道に迷ふた事もあれば、伊豆の旅をつゞけて伊東から熱海へ、宇佐美と網代越えに存外くたびれた記憶もある。

東京からテクテク奥多摩へむけ箱根ヶ崎で日がくれて一泊、机龍之助で名を賣つた御嶽を上下し、河内で晝食丹波山に一泊したが宿賃金八錢なり、あれから多摩川に別れて甲州笛吹川の上流柳澤へ出る。日下部で一泊、次で歙澤から富士川下り波木井より身延へお参り、陸路南部泊り、又舟で岩淵へ下つた思ひ出もある。

東京から一行四人この程亡くなられた近角常觀師や松波虎吉君もあつたが、おひるは蕨の宿でうどん二杯、夜は鴻の巢の木賃宿へつく、豆の出來た足を引すつてかなり宿からはなれてゐる風呂や、煮うりやへあと戻りする、煎餅ぶとんへあとさしで寝た窮屈な思ひ出もあれば、妙義を下りて松井田でもう日がかけりうす暗くなつてゐる。あれからわざわざ鐵道をさけて山路を榛名へといふのだから、道

をたづねても、もう日がくれる、道中に宿はない、山道は紛れやすい、おやめなさいといふのを、みなみな意地を張つてかまはず出かけるとすぐ日はとつぶりくれる、岐れ路では路しるべの石をさがしてタバコの火を吹いたり、手先でなせて右榛名みちとあるのはよいが、その石が倒れてあると、どういふむきに立つてあつたのか分らない。いつのまにか道を迷ふて、木こりの小屋にゆきつく、又々何里逆戻り、秋間といふ村にたどりついたのが夜中の二時、その昔し宿屋をしたといふ家をたたき起して、とめて貰つた、あの時の雑炊のうまさはいまだに忘れられない。

まだ日露戦役前であつた、ベルギーへ留學の折は、往きの道中にシベリアの旅にも數々の思ひ出もあつたが、一と夏ラインからアルプスへと獨り旅をつゞけた。いつも地圖と時間表と時計と首つ引、ポケット字引が何よりのたよりで、手さげカバン一つ軽々と五十日ばかり、只の一人だから止むなく片言のドイツ語フランス語も少しは口軽くなつた。モン・ブランの中腹シャモニーの氷野を吹雪の中に、フランス人とポーランド人と同行四人案内者一人と一本の長いロープにつながれて横切つたも忘れぬ思ひ出であつた。

五十の阪をそこそこに外遊した時は、アメリカでは諸井希臘公使、ドイツからチエッコへは中島久萬吉男、イタリーでは澁澤元治博士と偶然に一處になつたが、イギリスからフランス、ベルギー、ド

イツ、ポーランド、オーストリア、ハンガリーみなな獨り旅であつた、いや、殊更獨り旅をえらん
だ。そんな事はなんでもないとはいふかも知れぬが、語も土地も不案内だから二人三人とつれをつくて
旅をしたがる、かなりの長旅に神経が尖り、とかく顔を赤くしたり聲を高くしながらも、金魚のウン
コのやうにつながつてゆく。それは必ずもわるいといはぬが眞にその土地を知りたいと思へば、多數よ
りひとり、地圖と首引きで、車より徒歩の方がよく記憶にしみ込む。なによりも道中何かと故障が起
る、事故にぶつかると、そうした時に同行の間にイザコザ文句をいひ合ふにも及ばない。すべては自分
が至らぬ事と自分を責める、それが修行となるのである。いはゆる可愛い子に旅をさせである。

こんな事は何も業々しく筆にするまでも無いが、あたかも人間の育つ時は木の育つ時と同じく、中
學校の終り頃から、高等學校時代がその頂上である。人間の教育といふものは教場だけでない。塾の
生活、寄宿寮の生活、近頃流行してゐる道場、そうした二十四時間生活に訓練があり、修養ができる
事と思ふ。高等學校には入つてから木賃や無錢の草鞋の旅、それがいついまでも我身につきまよふ
て、導いてくれるやうな氣がするので、こゝに長々しく筆にしたのである。

三、巡禮記

日本の内地では昔から西國三十三ヶ所の巡禮とか、四國八十八ヶ所の遍路とか、男も女も老いたる
も若きも、富めるも負しきも、みな杖をひき山を越え谷をわたつたのであつた。

私の故郷は紀州和歌山であつたが、西國参り四國遍路の外に、大峯山上といふのがあつた。女人禁
制だから若い男子は三七二十一日間齋戒精進して、みな白衣をまとひ大峯に登山した。大阪などは
大峯からかへりの人たちの、股の下をくゞると災難よけになるなどいはれたとの事である。現在でも
四國では地方の娘子たちは遍路をしたといふ事は、お嫁入りの一つの資格になつてゐる。

「可愛い子には旅をさせ」といふ諺もあるが、旅によりて風光を觀賞するもよいが、何よりも春夏秋冬
冬かほかた土地にかはつた人情風俗に接する、くさくさの土地の地理歴史産業あらゆる見聞をひるめ
る。今日では汽車、汽船、電車、自動車などの便があるので昔のやうな修行にはならぬが、それでも
なにかと見聞をひろくし、人情のつらさ、うるはしさにも接するのである。

昔は神佛への信仰とむすびつけられ、徒歩で野を渡り山を越え、心持ちが清淨になるばかりでな
い、知らず知らずの間に運動をつづけ、いつのまにか消化器病などは自然となをつたのである。その
標本ともいふべきが順禮である。

由來靈場の参拜は功德をうけ冥福を得べき修行なりとて、回教徒のメッカをはじめ、基督教徒のイ

エルサレムへの順禮、次でローマへ巡禮が盛んとなり。印度では佛陀の誕生地カピラ藍毘陀園、成道地佛陀伽耶、初轉法輪地鹿野苑、及び入滅地拘尸城の娑羅樹林の四大靈場が順禮の聖地であり、かの玄奘などは七世紀の頃に支那から印度へ順禮してゐる。佛教、バラモン教、印度教に適せる順禮の慣習は支那に東漸し、更に我國では古く役の行者、くだりて最澄、空海、遊行など高僧の諸國巡歴あり、花山法皇の御行脚修行は廣く傳へられ、西國三十三ヶ所の巡禮として名高く、その外阪東三十三ヶ所秩父三十四ヶ所巡禮あり、一向宗には東方及び西方各二十四輩の巡禮あり、淨土宗には二十五ヶ所あり、百寺めぐり、十八檀林めぐりあり、六十六の國をめぐる六十六部略して六部の巡禮あり。八十八ヶ所は四國の外に江戸にもできた。その他千社参りあり、六阿彌陀参り、六地藏参り、四十八ヶ所地藏参りなど數知れずにあるが、中にも西國三十三ヶ所と四國八十八ヶ所が最も有名であり、觀光の氣分も手傳ふて今にそのあとを絶たない。

四、四國八十八ヶ所

近畿方面は交通が発達し、近代文化の色が横溢してゐるので、西國三十三ヶ所参りには巡禮の氣分は次第薄いで、遍路の姿も次第に見られなくなつた。四國八十八ヶ所は、四國そのものが島であるか

ら、別天地のやうな氣持ちがする、旅といふ情緒も強くにじみ出る、ことに土佐それも西部となるとまだ鐵路からはなれてゐるので一層その昔の巡禮氣分が浮んでゐる。

四國八十八ヶ所の巡禮は特に遍路といはれてゐる。遍路又邊路とも邊土ともしるされる。海邊險峻なる土地の義と傳へられる。寺から寺へノビにして三百六十里にわたる難路を、甲かけ脚はんわらじで巡禮したのである。遍路の衆は一年に十萬から十五萬人位といはれるが、四國の島の外よりの旅人も少くないが、四國のうちでは若い男も女も巡禮するのが一人前になるアカシのやうに見られた。世の中の苦勞をなめてくる、大師の徳にすがつてくる。家を出るときも一人で四五圓位しか持つて出ない、使ひはたしてかへるもあれば、貰ひだめしてかへるもあり、中には始めから一錢も持たぬ者もあれば、稀に數十圓の金を使ひ果たすためしもある。

施しをうけるといふ事は決してらくな事ではない、施しをうけて金なり物のありがた味もわかれば今度は施しをする。あたたかい慈悲心もわいてくる。遍路は少くとも一日に八軒の接待をうけねばならず、その爲めに軒に立ち誦經する。處によると町々でも軒端に品物をならべる、又寺へ持ちよる。接待する品々は、お金、お米、わらぢ、はがき、手拭、餅、すし、たまご、お芋、紙などである。

遍路は寺々へ自分の祈願をこめた札を納める。その札には靈場順拜者の住所姓名を書き願文を認め

るが、願文は大抵『家内安全』とか『天下泰平』とかいふ風な、きまり文句である。お札の大きさは幅二寸長さ五寸位が普通で、色は大抵白紙であるが、七回以上の順拜者は青色を用ひ、十回以上は赤色を用ひ、二十回以上は金色を用ふる。又五十回以上の順拜者は赤い肩衣を着る。この人たちは、どこかの遍路宿でも無料で泊れる。つまり順禮の元老としてお宿の接待をうけるので。相撲や芝居の木戸御免といふ側である。

遍路は遍路専門の木賃宿の外にはとまる事ができない。一宿二十錢位であるが、土佐あたりの海邊の木賃宿には風通しもよく、小ギレイなもある。遍路は道中に、木賃に、お寺に、くさぐさの老幼男女と道づれになる、旅は道づれ世はなさけで、そこに人間の學問もできるといふものである。

五、遍路の旅

頬かむりの上に菅笠を着て、白い肩衣に笈を負ひ、甲掛に脚絆わらぢ、女は多く青い頬冠に青い甲掛をつけてゐる、春先き櫻の花咲き、菜の花匂ふ四國路に、山のふもと野の末、川の岸に白衣の姿をながめ、そここゝに鉦の音の遠く近くゆるく流れくる音を聞くは、あわたしい汽車やバスの旅の人には打つてかはずつた旅の趣味とおもふ。

小山田のあぜ道つたふ遍路の衆

しばらく絶えてまたつゞきたり

見覚えある紅甲かけの子をつれし

姫にまたもめぐりあひたり

桃咲ける山かげにして衣更ふる

遍路のそばをしづかに通る 五番地藏寺

ぬかづけば梢をならす風のあり

をり／＼に聞ゆ遍路の鈴が音 八十一番白峯寺

四國路の遍路もこゝにきはまりて

黒潮よする足摺岬に 三十八番金剛福寺

海邊より一筋道を山門へ

すげ笠つゞき鉦の音聞け 二十三番薬王寺

土佐泊わたり舟まつ棧橋に

遍路の衆とまじりて吾居る 土佐泊

この寺は櫻咲みちてしづかなり

老いし遍路のたゞ一人くだる 十番恩山寺

遍路気分ことに土佐路の遍路気分には情趣のあふるゝものがある。「遍路」の第五十六節に、

土佐の西部窪川——久禮の間には道の兩側に殆んど半丁おきに箱がならんでゐる。

蜜柑箱またそれに似た箱を横にし、開いた口を往來へむけ、枕の上のせて道端に立てられてゐる。中にはお米もある、團子もある、玉子もある、四五皿ほどならべられてゐる。一皿は二錢が普通である。

遍路の人はお鳥目と引きかへに好む品と取りかへるのである。そこには誰一人番人もゐないから盗んでもよし、序に引かへにおいてあるお鳥目まで引きさらつてよいわけであるが、信仰にもえてゐる遍路の衆は、弘法大師と同行二人である、そんな罰當りをするはずもなく、また土地の人々にしてから、横合からそんな不ならちをする懸念もない。

これは昭和九年の思ひ出であるが、鬼國といはれた交通不便な土佐も高知から西へかけての事で、東の方室戸へむけての街道ではもはや見うけられない、窪川あたりにしてもいつまでこうした名残がとゞめられる事か、志ある人は今のうちに杖をひく事である。

六、西國新三十三ヶ所 上

四國八十八ヶ所も、土佐の西南端なる足摺崎の金剛福寺にとどめをさし、重立ちし寺々もめぐつて見た。つづいて西國三十三ヶ所も漸くの事お参りしたが、交通關係も昔とはいちじるしくかはつて来た、信仰も動いて来た。御宗旨とか縁起とかいふ事もあるが、御信心に觀光をかねた意味から自分の知るかぎり、宗派の別などやかましくいはずに、新たなる三十三ヶ所のルートをつくつて見た。ほんの参考までである。僕の新三十三ヶ所といふのは、

第一番が郡智山青岸渡寺（第一番札所）

である。熊野灘の風光を見はるかす、杉生の谷をへだてて郡智の大瀧をのぞむ、さすがに三十三ヶ所のいの一番として恥かしくない。それから道中に由良の興國寺もあり、音に名高い道成寺もあるがそれらは指を屈するのはどうかと思ふ、先づ道すがら参詣するとして、

第二番が紀三井寺（第二番札所）

である。名草山を脊にし、鹽釜の烟り、鳴きわたる田鶴も姿をかくしたが、和歌の浦曲を一目に見た景色は他に類が少ない。

第三番が根來寺

である。眞義眞言の總本山、かつては太閤秀吉の軍を迎へて一戦に及んだのだから相當なものであり、その爲めに力を削がれて大和の長谷と京の東寺と三分されたと記憶してゐるが、その昔盛んなりしころをしのぶ心持から、特殊の味を持つてゐる。特に山櫻の咲き匂ふところがよい。あれから第三番の札所粉河寺へ一寸より道してもよい。第四番の檜尾寺も相當なものであるが、いづれにしても阪和線により一と先づ大阪阿部野に着く。すぐそばの、

第四番の四天王寺

にお参りする。これはわざわざ紹介するまでもない事とおもふ。おなじみの五重の塔は大風害で倒れてるが再建される。あれから大阪をぬけて阪急線により箕面の溪谷に沿うて、

第五番の勝尾寺（第二十二番札所）

へ登る、あれから早野勘平君のあとをたづねても、たづねなくとも裏山傳ひに、

第六番は能勢の妙見さま

へお籠りもわるくない。妙見さまは御参詣が多いのでケーブルがかゝつてゐる。ケーブルを下る「猪名」の「ささ原風吹けば」の歌でなじみの猪名川に沿うて第二十三番札所の中山寺を左にながめ、寶塚温

泉に一泊。少女歌劇を見ても見なくてもそれは御隨意として、寶塚ゴルフリンクスに沿ひ逆瀬川をさかのぼる。六甲山のドライブウェイを石の寶殿から六甲の尾根傳ひ、右に播丹の山野をながめ、左に津の國茅渚の海を見おろし、はるかに淡路の島山をのぞむ。まことに絶景かなである。六甲ホテルに一泊が早すぎれば晝餐。さらに西すれば、

第七番は摩耶天上寺

にまゐる。此道中、海に山に眺めは至る處よしよしである。神戸の町にくだる。布引の瀧、湊川神社、須磨寺、一の谷、明石の人丸神社から高砂尾上の松、姫路の白鷺城から右にされる。御所櫻の三段目おあさのくどきに出てくる、御稚児さん時代の武藏坊辨慶事鬼若丸で名を賣つてゐる、

第八番の書寫山圓教寺（第二十四番札所）

へ。次いで播磨と攝津と丹波三國の國境にまたがれる獨立山の天へんに立てる京の清水の本家と號する、

第九番の播州の清水寺（第二十六番札所）

に登りて一泊はるかに瀬戸の島山を見はるかすも妙。あれから阪鶴線により與謝の海、天の橋立の景勝を眞下にながめる。おなじみの、

第十番は成相山（第二十八番札所）

此ところ丹後の宮津でガマ口を空にするもせぬも御心まかせ。引かへして舞鶴をぬけ、丹後と若狭の國境なる、青葉山松尾寺（第二十九番札所）へ立ちよるもよし。若州から近江路へ抜け、琵琶の湖上に、

第十一番の竹生島（第三十番札所）

をたづねる。湖畔の、

第十二番が長命寺（第三十一番札所）

あれから安土の故城址より、第三十二番の札所その昔六角家の城跡であつた観音寺もすてがたい。東海道線を引きかへし紫式部の源氏物語や、近江八景で評判の方が少々勝ちすぎてゐる。

第十三番の石山寺

これが現在も第十三番の札所になつてゐる。

七、西國新三十三ヶ所 下

石山寺から第十二番の岩間寺、第十一番の奥醍醐へと山道も妙なれば、又宇治川に沿うて宇治に下

るも一案なれど、新三十三ヶ所は膳所、粟津、大津をぬけて、

第十四番の三井寺（第十四番札所）

は長等山園城寺辨慶鐘で有名であり、謡曲でおなじみであり、八景のながめに名が高い。これから唐崎を経て湖邊傳ひに坂本なる日吉神社からケーブルによりてもよらずとも、

第十五番比叡山延暦寺

さらに又ケーブルにて向ふ八瀬大原に下り、京洛の地に入ればお寺さんは鈴成りである。京の街中には札所としては革堂、六波羅密寺、六角堂、今熊野があり。その外に南禪寺、銀閣寺、東寺、興正寺、泉涌寺、東福寺、東西本願寺から大徳寺、妙心寺、仁和寺、天龍寺、廣隆寺など、いづれも捨てがたいが、到底際限がない。思ひ切つて三尾の中から、

第十六番松尾山鞍馬寺

第十七番高尾山神護寺

の山々をよち、清瀧川の流れに沿うて嵐山に出る。さらに山傳ひに西山の、

第十八番の善峯寺

に詣でる。京洛の山河を西山からながめ、逢阪、比叡の連山の間に伊吹大嶺のかすめるを見るもよ

宝積寺、揚谷寺などに賽し、山崎から七條にかへる。京の街では、

第十九番金閣寺

第二十番智恩院

第二十一番清水寺

とおなじみの深すぎる寺々を選んで見る。それから、

桃山御陵におまわりして、醍醐三寶院うら山の、

第二十二番奥醍醐寺

にのぼる。黄檗山萬福寺もすてがたいが

第二十三番宇治鳳凰堂

にて山城の國におさらばをつけ、大和路に入り大軌線にて、

第二十四番生駒の聖天さま寶山寺

これは又とても發展しモダンな盛り場になつてゐる。うら山に登る數町にして、一面には大和平野

發展し、一面には大阪の町々を眼の下に、淡路島は青螺の如く霞んでる。ケーブルにて往復、奈良に

入る。猿澤の池、若草の山、春日神社の境内は繪のやうである。東大寺、南圓堂、三月堂、四月堂、

このあたり一帯のお寺の總代として、小柄なれど興福寺境内の、

第二十五番二月堂

に賽する。青丹よし奈良のふりし都をあとに天理さん、三輪の茶屋をへて、参宮急行線により牡丹

名所、

第二十六番豊山長谷寺（第八番の札所）

に、それから大野の彌勒佛を拜し弘仁期代表の、

第二十七番室生寺

へ。再び櫻井に引きかへして談山神社から裏山を下りて岡寺、久米寺、橘寺、壺阪寺などへより道

して、

第二十八番吉野の金峰寺

藏王堂、吉水院から如意輪寺に吉野の昔をしのぶ。山傳ひに、

第二十九番は大峰の山王權現

女人禁制であるから、それは困るといへば中將姫でおなじみの當麻寺にてもかなりである。大和平

野に引きかへせば最古の名刹、

第三十番法隆寺

は何んとしても見のがせない。あれから、

第三十一番が信貴山毘沙門天

に登山する。河内路に入りて長野驛から、

第三十二番の観心寺

千早赤阪の故城址より女人高野に詣でる。再び高野線により真言の總本家弘法大師入寂の地、

第三十三番は高野山

を打ち止にする。

三十三ヶ所納めの札所は美濃の谷汲となつてゐるが、これはかけはなれてゐてそれほどにはえない。

もしそれ三河の鳳來寺ならば、振出しの那智山に相對していささか釣合もとれさうだが、近江路から遠州境までは飛びすぎる。

八、千島遊記一、地圖の錯覺

近畿四國の通路めぐりだけではうつりがよくない。本土をはなれて北海道、樺太、琉球、臺灣、朝

鮮などの曾遊の地をそれからそれへと追憶して見たが、北洋の豪岩雄大なる景色もさる事ながら北門の關心はますます深く深からざるを得ず、しかも滿支から南方一帯を通じて、千島が全然世間から忘れられてゐるいや知られずにある。されば近刊海南全集にもせられてあるが、こゝにその一半を轉載する事とした。

利尻島に夏の日暮れて海沿ひの

鯨小屋に灯はともりそめたり

五日の夕方宗谷海峡に入る、六日の朝は左舷に樺太の中知床岬から東海岸の一帶を眺めたが、それもいつしか見えずなりてオホーツクの海のとゞ中を北千島を指して進んで行く。夏の北の海は波なく雲なく、行交ふ船もなく、一時間十ノット餘の速力で船は唯北へ北へと進んで行く。七月七日聖戦の記念日に當り船客船員列を正し宮城を遙拜し將士に黙禱を捧げ聖壽の萬武を三唱す。

オホーツクの海原を行く船の上に

萬武を唱ふ七月七日

日の本の光りあまねしオホーツクの

海原を豊に我が船は行くも

鳥飛ばす魚躍らず船見へず

空に雲なく波なく海に浪なし

中千島の北の端なるオネコタン島と奥千島の南の端なる幌筵島とをへだてるオネコタン水道にはいつたのは八日の朝であつた。

夏の千島にはつき物である海霧が濃くせまりて島の影も何も見へない。ブリツヂに立つた船長は霧の色とその流れ水の色とその動き、さては折々に鳴らす汽笛の反響に耳と目の全能力を働らかして居る。近頃は層場には此の水道を通る船丈でも夥しい數である。出来るならラジオビーコンを、せめて燈臺を、霧笛報の設備をと繰返して訴へる。

われ等の船は珍らしくもガスに襲はれたのは此の水道だけで、太平洋側にぬけて見ればガスは晴れて忽然と目の前に幌筵の連山を仰いだのである。

・ところでこれ迄の航程に絶へず地圖の錯覺が伴うて居た、それは宗谷を離れてから北千島の入口まで丸々二日を要したと謂ふことである。我々の地圖で見ると千島は、それ程遠くはなかつたはずである。千島ばかりでない北海道を旅するものも何時も地圖の錯覺で、北海道の思つたより大きいのでくさぐさの誤解を生む。

多くの場合に北海道樺太などの尺度は本土よりも小さくなつて居る。北海道の面積が九州に四國を二ツ合せたよりも尙大きいとは考へられて居ない。地圖には経度や緯度の目もりがあり、尺度表がついて居るからよいではないかと言ふかも知れぬが、あの尺度表は、コンパスを片手に持つて居る専門家でなくば役に立たない。七十萬分の一とか百萬分の一とか書いてあつても、それにより目分量で比較を立てることはかなりむづかしい。せめては北海道の圖に本土の二分の一大とか、又千島の圖に本土の十分の一大とかさう謂ふ説明をつけて置くことが一策と思ふ。

千島は國後、擇捉、色丹の三島より成る南千島、得撫島よりオネコタン島に至る中部千島と幌筵、占守、アライト島より成る北千島と、大小二十四の火山系の嶋嶼より成り延長一千八百八十軒に亘つて居る、だから此の度日本の新領土となつた新南群島は暫く措いて、臺灣から千島の間は、臺灣から九州、九州から津輕海峽、津輕海峽から北千島と大凡三分されて居ると見るがよい。我等は此度小樽より其の三分の一近い海上を北へ北へと旅したのであつた。

九、千島遊記 四 幌筵より占守へ

北千島の第一は摺鉢灣、第二日は壘山に寄港、夜は柏原に、第三日は片岡灣アライトを経て加熊別

に、第四日は南千島へ南下したのであつた。

幌筵島の柏原と占守島の片岡灣は水道をはさみて相面してゐる。片岡灣は、北千島唯一の史蹟地である。

明治八年千島樺太の交換條約締結せらるるや開拓使理事官時任爲基は日進艦にて占守島を巡視して此の灣をたづね、次で明治十七年根室縣令湯地定基占守島を訪ひ、此地の土人九十七人を南千島の色丹島にうつしてゐる。明治大帝の旨を拜し片岡侍従の擇捉島に越年したのは明治二十四年の冬で、あくる二十五年占守島をたづねてゐる。片岡灣の名の生れたわけで、あくる二十六年郡司成忠大尉報効義會を組織し此地に渡りて越年した。

かへり見れば上野不忍池畔における福島中佐のシベリア單騎横斷の歡迎式、向島言問から郡司大尉の千島への壯行式、いづれも古い淡い思ひ出となつてゐるが、郡司大尉の一行はかなり難航を重ねて千島に入り、その後も衣食住凡ての手當が充分でなく、そのころはまだ野菜の栽培も思ふに任せず壞血症に斃れた人も少くなかつた。片岡灣には報効義會當時の建物、齋藤實大將の筆になる永鎮北陸之碑、撰志堅く在島四十年最後まで踏み止まつた別所佐吉翁の碑、所三藏外二十九名の犠牲者慰靈の志士の碑などがある。志士の碑は小高い丘上にあるが、丘陵はハハ松のやうになつた榛の木に蔽はれて

ゐる、セカマド、榛の木など、ところどころ目つくが、風あたりの弱いところでも丈餘には延び得ない、澎湖島の榕樹黄槿とおなじやうに、風が強いので枝はみなくねり曲つて地にはつてゐる。

風をいたみ尺にのび得ぬ榛の木の

はひ伏す丘に志士の靈はねむる

雪は波打ち際にまでとけずにある。朔風に樹々は屈んでゐる。さりとては千島は寒さのきびしいところと連想されやうが、ありやうは千島の冬は零點下十五度を下らないのである。北海道、樺太でもまだずつと温度は下る、帯廣釧路などは零點以下四十度にもなる。北千島の方がよほど温度は高いのである。

私が七年間臺灣在職中の體驗によつても、眞夏の臺北の温度は長崎、熊本、廣島、大阪などより低い事は少なくなかつた。臺灣には冬がない、一年中あたたかいといふまでである。南洋方面とても赤道直下である、さぞ焼きつくやうに暑いと思はれるが、どうして臺灣より凌ぎやすいところが少ない。

千島も温度は存外低くない、只一年中涼しい、そこに夏がないといふまでである。しかも今までは出かけていつでも仕事が無かつたのである。そこへ北洋漁業の發展となつた。ここに北千島の躍進時

代が擡頭したのである。しかし漁業だけでは夏の漁期に限られる。しかし資源は海だけでない。今まで歴代の北海道長官もこの邊土にまでは足を印しなかつたが、此夏には戸塚長官の巡視があつた。我等の如き視察團もこれがはじめてである。必ずや次で来るものは、先づ産業の開発に伴ふ築港であり、航路の標識であらねばならぬ。

千島には狐もぐら熊などもあれば、藪蚊もゐる、アトもゐる。蠅は砂中に卵をひりつけて一年中生きてるといふ、況んや人間においておやである。僕の新萬葉集に録されてゐる舊作は、滿洲の移民部落にて何十回となく筆にし、その後小説や劇やトーキーにも紹介されてある。それは、

滿洲の寒さ日本人に堪え得ぬか

そのはるか北のシベリヤに町あり

といふ理窟ばい歌である。

今この滿洲の代りに北千島とおきかへたら、

そのはるか北のカムサツカに町あり

となり、さらに、

北の北のアラスカに町あり

といつてもよいのである。

十、千島遊記 五 最北端アライト島

占守島の北端國端崎からカムサツカは指呼の間にある。しかし日本の北のはては占守島でなく、アライト島である。

アライト島を禮讚したいのは最北端で、しかも高峯といふ事である。人間にも一國一城のあるじからのしていつた織田信長、徳川家康といふやうなものあれば、腕一本から叩きあげた北條長氏、豊臣秀吉といふやうなものもある。山にもネパール高原の上に立てるヒマラヤ連峯、信濃高原の山にむら立てる日本アルプスの山々もあるが、アライト島の如く海洋から聳えてゐるものもある。アライト富士は此點から買つてやらねばならない。

海中からぬき出でたる山には、アライト富士の外に宗谷海峡の利尻富士がある。南下して伊豆の大島、濟州島の漢拏山などいづれもかなり廣い裾野を擁してゐるが先づ仲間に入れてやつてよい、さらに南下して九州に屋久富士がある。九州では雲仙、彦山、久住から霧島の韓國岳など相當高い山が散らばつてゐるが、いづれも屋久の下にある。屋久が九州の最高峯であるといふ事は愉快な存在である。

アライトに至りてはその屋久を遙かに抜いてゐる。千島には幌筵の千藏岳、擇捉の散布岳、國後の茶々嶽などは、いづれも樺太の最高峯敷香嶽よりはすつと高い、しかしアライトには及ばない。なによりもカムサツカの最高峯カムバリナヤを眼下に見てゐる。甚だ愉快である。北海道に入ると石狩十勝の高原に十勝岳、旭岳、石狩岳等々の連峯群立してゐるが、いづれもアライトに及ばない、況んや蝦夷富士といはるるシリベシ山などは問題にならない。

津軽海峡をわたる、岩木山岩手山之れ又及ばない。鳥海山吾妻山大日岳等に至りては相當なものであるがアライトよりは低い、日光の白根にぶつかつてはじめてアライトはバトンを渡す事になる。

之を南の方からいへば沖繩から九州四國中國近畿いづれにもアライト富士の向ふを張れる山は無いのである。アライトは日本の最北端であり、しかも海洋中からぬき出た島山であり、それがとても高い、ここにアライト富士に絶讃の辭を呈しても誰も異議は無いとおもふ。

幌筵の連峯すらも見られた事が稀なりといふ、それ程夏の千島はいつもガスに閉されてゐる。ましてアライトの絶頂は先づ仰げないとあきらめる外は無い。柏原に入る時念の爲め、一と目なりともアライトが見られたならばと水道をオホソク海の方へぬけたが、まさしくアライト富士が見られた。いくばくもなく雲にかくれたが、とにかく一時なりとも見られた。あくる日は片岡をすまして國端

崎近くすすめたが、ガスがひどいので晝食豫定地であるアライトへ航路を轉じる。今日はアライトは見られまいとあきらめてゐると、その内にガスが薄らいでいつの間にか、白雪を山頂から海の裾までかつげるアライト富士の壯嚴なる全貌が我等が前に現はれたのである。我等凡人の眼には高低や大小はよく分らない、大觀畫伯の富士の繪の様なのが有りのままに現はれた。その偉大さ、清淨無垢な姿に打たれたのである。大觀畫伯に一と目見せたい、甲州吉田に富士を参がくべく通つてゐる和田英作畫伯にも見せたい。さうした氣持がおさへ切れ無かつた。

それへさらに大きな附録がついた。船の左舷に二つの雪をかつげる富士山が雲表の上に現はれた。幌筵の高峯千藏岳と後矢尻岳である。さらにかへり見すれば、鼠色に太いガスの帯を横へてゐる、その上にカムサツカのカムバリナヤの雪嶺も日にかがよふてゐる。もはや筆紙のつくすべくもない。同人吉植君の歌があつたが今手元にない。僕のはロクなものが無い、とても現はせない。

日の本の北のはたてに雪かつぐ

アライトを仰ぎ居り命なりけり

アライトの東京港に上陸晝食する、卓にのぼる鯨のさしみをむさぼり喰ふ。

十一、千島遊記六 擇捉島

七月十一日鮮海丸は一行をのせて中千島を左に見て南へ南へと下る。

中千島で得撫島は幕末の史蹟のあとであり、今農林省直營の養狐場になつてゐる。由來中千島は中央直轄の禁漁地域である。オットセイの保護といふ名目で日米英露四ヶ國間に條約が結ばれた、このあたりで日本側の自由漁獲にまかせたら、たまらないからである。この條約は十五年の有効期間をすぎてさらに長々とびのびとなつてゐたが、いよいよこの十月下旬から解約となつた。この點から見ても、今年の中千島解放といふまさに劃期的の年である、養狐とあはせて別に必らずや筆にする事があると思ふ。

十三日の朝である。擇捉を左舷に見つつ抹香鯨を横付けに黒烟をあげてゆく捕鯨船に追ひついた。擇捉の紗那の南となれる有萌の林兼の鯨工場へ運ばれつつあるのである。有萌は文化四年幕吏戸田又太夫が露船の侵掠に憤死したところであるが、我等一行ははからず此地で抹香鯨料理の光景を實觀した。この歌も短歌研究にのせられてゐる。

千島も擇捉までくると舊幕時代からの面影が残つてゐる。氣候も大分北海道の本土じみて、たんぼ

ぼ、百合、クローバー、女郎花、おだ巻、濱なすの花などが一時に咲き匂つてゐる。

春も夏も一時にきたる紗那の濱に

はまなすクローバーたんぼの花

栖原家に半世紀以上奉公してゐる坂内老人は函館からわざわざ見えて接待してくれたが、紗那川原に鱒を網で引きあげ石焼きのもてなしは有りがたかつた。扁平な大きな石に味噌をかためて土手をつくり、その中で鱒と玉ねぎの味噌焼きである。

栖原角兵衛も明治八年の千島樺太交換に樺太東西海岸五十八ヶ所の漁場はただの一萬八千圓の涙金で追つ拂はれてしまつた。今擇捉で仕事をつづけてるが、栖原家の一代記は、千島樺太の漁業史である、船中の講座に僕の最上徳内、近藤重藏、間宮林藏、松浦武四郎諸先生の史實談につき、山本厚三翁は栖原家について精しく話された。別に翁の筆を煩はしいものである。

擇捉から得撫へは先人の遺蹟が少くない。かの寛政の十二年近藤重藏が露人の立てた十字架をぬきとり、大日本惠登呂府の標柱を立てたのも、紗那から二十里北なる葎取岬の斷崖であつた。千島の史蹟のあとといつても誰もたづねてくるでなし、根室にしても函館にわたる一萬人中一人は來ないであらう。よろしく札幌神社の境内にさうした先人を表彰した記念の施設ができ鬼神もさくべき壯烈なる

先人のあと、それも只勇氣一點張りといふでない、天文算數に明るく、數々の地圖や記録や文献を残した偉人たちの正氣を、吾等のあとをつぐ青年たちに吹き込んでほしいと念願する。

十二、再び地圖の錯覺

終りに地圖の錯覺につき再び筆にする。

スケールのちがふ地圖による錯覺は北海道樺太を狭いものに、千島を割合に短かいものにしてしまふ。さうした錯覺につき記したから、かなり北海道方面は大きい、千島は北へ北へ遠い遠いといふ感じを深くしたとおもふ。しかし、又之とちがつて近頃の世界地圖が地球を丸いものとし、四角な扁平なものにしてしまつてゐるためにおこる錯覺がある。

吾等の中學時代には、机の上に地球儀をそなへ、筆立てに筆や鉛筆や孔雀の羽毛をさしたものである。孔雀の羽毛や筆立てはどうでもよいが、地球儀のなくなつた事はどうでもよくはないのである。しかも平面地圖には南北兩極に近づくと従ひ、次第にせばまつてゆくべきが、いつまでも赤道方面と同じ幅で延びてゆく、カナダもグリーンランドもシベリアも北極に近づくとだだ廣くキャベツの葉のやうに開いてゐる。ここに大きな錯覺が起るのである。

横濱から桑港行とシャートル行とは日程が著しくちがふ、しかもシャートル行きは金華山沖から北海道東海岸へむけ上つてゆく、平面の地圖で見ると却て大廻りになるべきである。しかし近いはずである。地球が圓い、北へのぼるほど東西の幅はつまつてゆく、東京桑港間三千七百マイルに對し東京シャートル間は實に千五百マイルを短縮するのである。

近頃ノックス米海軍長官の言をかりると、新聞ではアラスカ方面の陸海軍が要塞航空要港などの基地として七千二百萬弗の軍費を割當て、ミッドウェイ及びダッチハーバーの基地は今回完成した、八月一日から就役するといふ事を宣言せりと傳へてゐる。

巨大な白象であつたアラスカが、七百二十萬弗でロシアから買収されたのは南北戦争がすんで間の無い事であつた。ここにはアラスカの歴史をここで述べるスペースも無いが、アラスカのシワアド港から浦港へは三千四百マイル、東京へは三千三百マイルであり、アリニューシヤン群島東部の要港ダッチハーバーからはシャートルへ二千マイル、東京へは三千マイル未滿である、アリニューシヤン群島の西部からは北千島までは一飛び七百マイル位であらう。

さらに北極方面の地圖の錯覺はシベリヤ方面に於て一層甚しい、我等は先づニューヨークからアイスランドへは三千マイルであり、アイスランドからベルリン又はロンドンへは九百マイルにすぎない

といふ事を忘れてはならない。そのベルリンからいくばくもなく、フィンランドと境してゐるソ聯の北氷洋に面せる最西の港ムルマンスクがある。此港はメキシコ灣から、暖流の餘波をうけて不凍港である。恐らく此一文が印刷される頃はドイツと芬蘭により占領されてゐるかと思ふが、このムルマンスクが實に極東への海路空路の基點である、ムルマンスクからベェリング海峽まではわづかに二千マイルにすぎない。

あの平面な地圖では飛んでも無い錯覺を起こす、よろしく地球儀について北海道樺太を見よ。さらに千島を見よ。さらにさらに世界列國を見よ。さうして我邦内外の狀態を再思三考せよ。

日本は東に西に南に北に、すべて深い關心が拂はれねばならぬ。(時は十六年八月六日、樺太西海岸國境に遠からぬ惠須取の病床にて)

十三、御陵参拜と登山

神社佛閣に参拜する事が古くより我國の美はしい誇りとすべき旅の一つのあらはれである。しかし神社に参拜するのは旅の趣味と解すべきでなく、之は國民としての行であり信仰である。伊勢参りお宮参りといふのも江戸時代から明治維新以後に通じ、その間お参りする心構へには少くとも旅心相當

へだたりがある。伊勢神宮榎原神宮桃山御陵の参拜は極めて嚴肅なるものであつて、つつしみて青年諸氏は我國體の尊さ有りがたさに深き感銘を以て参拜すべきであり、西行法師の、

何事のおはしますかは知らねども

かたじけなさに涙こぼるる

の一首につくされてゐると思ふ。

近時山陵参拜の行はれ來しは喜ばしき事であるが、そうした参拜の折にはその附近の史蹟をたづねる事を忘れないやうにありたい。

吉野なる後醍醐天皇塔尾の御陵に参拜する者は、必ずや吉野神宮に参拜する、村上義光墓、藏王堂、吉水院、如意輪堂へおまわりする。さらに大峯へ山上するがよい。長野の觀心寺に後村上天皇の御陵に参拜する者は千早城趾、赤坂城趾、寄手塚、身方塚、楠妣庵をおとづれるべきである。

堺大仙御陵の折には堺市の歴史をたづねる、妙國寺に土佐烈士のあとを弔ふ。古市方面の御陵の折は大阪の役の史蹟をしらべる。王寺附近の御陵の折は龍田神社、法隆寺、信貴山がある。畝傍櫻井方面の折は大和の三山あり岡寺、橋寺、久米寺、壺阪寺、三輪神社、談山神社あり、建國より奈良朝の盛事をしのぶべきである。奈良西大寺附近又は京都は桃山山科より泉涌寺方面、洛北は東に西にすべて

が名所舊蹟である。

さらに足を四國に入るときは白峯に崇徳天皇の白峯陵あり、中國のはてに安徳天皇の御陵あり、さらに隱岐に入りては後鳥羽天皇、佐渡に入りては順徳天皇の御火葬場に参拜して、思ひを平安鎌倉朝の昔をしのぶべきである。

日本では風光に富めるばかりでない神社佛閣参拜といふ、他にためしの少ないならはしがある。そこへ近頃は登山熱が高まり、中部山岳といはず、あらゆる山岳地帯は登山家の踏破するところとなりつつある。従つて青年の獨擅場ともいふべき山岳行スキー行につきては、筆にすることをやめる事とした。一般のスポーツと共に既に青年の親しく體驗しつつある事で、特にここに説く事は重複でもあり紙幅の許さぬところである。只そうした場合の精神のもち方及び周密に準備し計畫し、事故にあひて惑はず、最後まで冷静に熟慮斷行すべく平素の修養につき苦言を呈しておく。

十四、史蹟 戦蹟

我邦の旅行に史蹟、殊に戦蹟旅行の比較的等閑視せられてゐる事は誠に不思議である、武を尙び武を以て立つ日本として全く珍らしい現象である。九州で菊池武光筑後川の戦はどのへんであつたか、恐ら

く多くは知らない。福岡の市中にあるから元寇のあとは案内される、鹿兒島の市中だから城山にはのぼる。熊本城又然りだが、田原阪といふともう足が遠くなる、秀吉朝鮮の役の名護屋のあとといつてもどの邊にあるかも知らぬ人が多いのでは無いか。中國四國に入りても、一谷は須磨舞子にゆく道すがらに電車かバスで只指されてうなづく程度では無からうか。高松郊外の屋島は何よりもあの眺望に引ずられて出かけると思ふが、秀吉の大軍を前にし、命をすてたる清水宗治の史蹟高松の水攻めといはれる、あの高松はどこかとたづねられ、いく人が之に答へるのであらうか。

近畿に金剛山千早の城を見る人はさすがに激増しても來たであらう、湊川神社や櫻井のあとをたづねる人も多くはなつたであらう。しかし手近い大阪の陣でも天王山又宇治川の古戰場近くは鳥羽伏見の戰場もどれだけ史蹟としてながめられるのであらうか。

東海東山北陸より東北へかけ白虎隊によりて會津の鶴の城飯盛山は旅人の足を引つけてゐる。しかし信玄謙信接戦の川中島、鳥居強右衛門忠死の長篠の城、信玄と家康と死闘の三方ヶ原、家康の秀吉軍を破りし長久手の戦、七本鎗で知られし賤ヶ嶽、秀吉家康相對峙した小牧山、信長義元の桶狭間、そうした史蹟がどれまで世人の注視を引いてゐるだらうか。何よりも關ヶ原を引つ切りなく汽車ははしつてゐるが、ここに下車する旅の人は、近頃出來た紡績會社の用件をはなれて、何人あるのであら

うか。

そうした心持から長文をいとはず、舊作の中から世間より忘れられてゐる關ヶ原の古戦場遊記と、四國高松にゆけば必らず見物するであらう屋島につき、旅の人としての見方を参考とすべく、ここに摘録して青年諸君の史蹟旅行をすすめる。長崎にシーボルトの跡をとふもよい、萩に松下村塾をたづねるもよい。堺の町も下田の港もよい。廣島なる山陽籠居の跡も、松阪の宣長の鈴の屋跡もよい。土佐烈士の妙國寺も赤穂義士の泉岳寺もよい。千島に近藤守重、樺太に間宮林藏のあとをとふもよい。城めぐりに高橋紹運の寶満山、別所長治の三木の城、鳥居元忠伏見の城、信長の安土の城、謙信の春日山、北畠治房の關の城、その他現存の城めぐりもよい。旅と史蹟……何よりも青年諸君にすすめる。しかもそれはあわただしい團體見物の素通式でない旅をすすめる。もしそれ詩に文に句に歌ふ。之を筆にし、之を口にするならば旅の情趣さらにこまやかなるものがあらう。

十五、關ヶ原古戦場 其一

ウォータールールの戦場

日本では不思議と古戦場への関心が薄く、僕の白國留學中いつもウォータールールの戦跡見物案内に

は閉口した。ウォータールールの古戦場は、府の南停車場から地方鐵道で小一時間、下車すると乗合馬車……今ならば乗合自動車……が何臺か待合はしてゐる。馬車は一望際涯なき平野を走つてゆく、喇叭の音の合間合間に、案内人のベラベラとしやべつてゐるといふことだけは分るが、第一當方はウォータールールの戦といつても、將軍としてはナポレオンとウエリントン、それへまあネー將軍の名前位しか知らない、地名に至りてはただウォータールール一點張りである。これが關ヶ原の戦なら、兩軍の勇士の面々から、土地の名も耳につめてゐる、それにくらべてはウォータールールはのつぺらぼうの平野であり、ここは誰々が何んとかして何んとしたなど、説き立てるのであらうが、假令佛語をよく聞き分け得ても、地名にも人名にもなじみがない、況んや馬車の上でベラベラとしやべられれば、ピンからキリまで分らない。小一時間馬車をはしらせて、例のライオンの像をのつけてある記念塔下につくそこで戦場の案内記、寫眞、繪葉書、文鎮、紙切りナイフなど、それぞれにマークのついた記念物を求めて引き上げる。ザツツオールである。

そのウォータールールへ、案内せよ案内せよと内地より來る客毎にせびられる、二度三度と度重なると全くウンザリする。それなら見物する連中は史實に明るのかと、いふと左に非ずである。何んで見物したいのだ、それはただウォータールールといふ名前が世界歴史で記憶に残つてゐると、ベデカーと

いふ旅行案内記に仰山に記してある、その宣傳の結果に外ならない。しかも内地より見えたウォータールー戦跡見物志願者は、揃ひも揃うて御手許の關ヶ原の戦跡は一向に御存じが無いことだけは符節を合してゐる。もちろん彼氏等はいふ。ウォータールーは生涯先づ二度と見られない。關ヶ原はいつでも見られるからといふ。いかさま東海道線は關ヶ原驛を通過する。いつでも見られる、只いつでも見ないだけの事である。

遠く歐洲三界を例せずとも、旅順に遊ぶ者は必ず戦跡廻りをする、少くとも二〇三高地や東鷄冠山位は見物にまはる。それが内地では川中島も、小牧も長篠も關ヶ原も長久手も山崎も四條畷も、さては高松も、戦跡見物は殆ど御留守になつてゐる。まだ金剛山が近頃旅客の杖をひく位である。國史の教育は中々盛んなれども、實地をはなれて机上の暗記にいそがしい、十回の教授よりも一回の實地視察が尊いといふことがわからないらしい。そこへ一方でこうした方面の宣傳が皆目御留守になつてゐる、これでは誰も知らぬ存せぬといふに不思議はない。

中仙道は美濃近江寝物語の國境を越えて程なく不破の關となるが、それがまさしく關ヶ原のただ中にある。その關ヶ原に柳ヶ瀬よりの北國街道が相會し、關ヶ原の一つ東の驛垂井から大垣を経て南へ伊勢街道がわかれ、東へ赤坂を経て岐阜へむけ中仙道がはしつてゐる。

關ヶ原となればウォータールーとちがつて土地の名も、大垣、赤坂、南宮山、松尾山などがなじんであり、人の名には徳川家康と石田三成の外に、東軍としては福島正則、加藤嘉明、黒田長政、池田輝政、山内一豊、淺野幸長、細川忠興、藤堂高虎など豊臣直參の諸將をはじめ、徳川麾下の松平忠吉、井伊直政、本多忠勝などがあり、西軍としては毛利秀元、吉川廣家、小早川秀秋、長曾我部盛親、長束正家、安國寺惠瓊、脇坂安治をはじめ、石田三成と手を組んだ島津義弘、小西行長、宇喜田秀家、大谷吉繼など算へ立てたならば際限がない。その記憶の深く深い關ヶ原に、足を印したかといへば、關ヶ原を汽車では何回何十回となく通過はしてゐるはずだが、下車した人はあまりにも稀れであらう。

さうなると宣傳の世の中であるといふ事が考へられる。といふのはベデカーなり歐洲の旅行案内記などに白都のブルッセル案内記に、長々と克明にウォータールー戦跡の説明がつてなかつたならばウォータールーはどこにあるのやら知らず仕舞ひにすごしてしまふに相違ない。それは宣傳が足らぬ爲め、高松の水攻めの古跡が、岡山の驛から程遠からぬところにある事を、萬人知らずに通り返してゐるとかはりは無い。

僕はブルッセル市に留學中に先づウォータールー見物をする。さらに僕は見ず知らず人にまでよく

ウォータールーの案内役を仰せつかつた。あんな馬鹿馬鹿しい思ひ出はない。その馬鹿馬鹿しさにつけても日本へかへつたら、埋め合はせといふもをかしいが、かねかね見物したいと思ふてゐた關ヶ原を歸朝早々に見物する事と決め込んだが、さて明治三十七年日露の開戦のためあわただしく歸朝してから今年今日までいつのまにか四十年の星霜を越してゐる。その間關ヶ原を通過する事何十回たるを知らず、これまでに岐阜の講演に臨みしこと三四回、ことに揖斐の講演に出かけたのも、いづれは關ヶ原見物をと念じたのであつたが、或は歸りをいそぎ或は天候にめぐまれません、いつも此の次に此の次にとづるづるに今日まで機を失しつづけた。それが此の度岐阜縣内三ヶ所から講演をとの申込があつた。丁度その二日前に和歌山へ出講する事になつてゐる。今は一介の野人浪人のありがた味である。關ヶ原見物を書き入れにしてすぐに快諾した。和歌山より東海道線の上り汽車へ、あれから大垣にて下車、岐阜から出迎へられた今井社會教育主事と關ヶ原へ自動車を驅り、上野小學校長と關ヶ原役の生字引である藤井前關ヶ原町長兩氏の東道により、ここに長いとも長いとも四十年來の念願が初めて届いたのである。

十六、關ヶ原古戰場 其二

關ヶ原の役

豊臣秀吉は慶長三年八月十八日伏見城に長逝し、徳川家康が上杉景勝を討つべく大阪をあとにしたのは五年六月十六日であり、石田三成等同志を糾合し、鳥居元忠の死守した伏見城を陥れたのは八月一日であり、毛利宇喜田勢は伊勢路へ、大谷吉繼は北陸へ、石田小西島津勢は中仙道へ進發し、三成等の大垣城に入りしは八月の十一日である。

西變の報を聞きながら悠々と會津へ進軍をつづけた家康が、下野小山より引きかへしたのは七月二十四日で、結城秀康を會津への抑へにのこし、秀忠をして中仙道より、自からは海道より西進する事にした。福島、池田、井伊、細川、田中(吉政)等の諸將は八月の中旬に尾張清洲に軍を集め、家康の進旗をまつてゐたが、家康は中々腰をあげない。

當時武將達の向背がどうもはつきりしない、疑心暗鬼の世の中である。そこで家康に對する態度を明かにする必要があるといふので、豊臣譜代の武將たち悟るところあり、相會して岐阜城攻撃のことを議し、二十二日に攻撃にうつり二十三日に守將織田秀信は降参する。大垣城より呂久川附近へ援軍に向ひし石田島津の軍も、決戦を見ずして大垣に退城する。岐阜を陥れたる東軍の諸將は不破郡赤城に集營する。岐阜の捷報を耳にして家康はやつと御みこしを上げ、九月の一日に江戸を發し十三日岐

阜に、十四日正午に赤坂に到着した。

赤坂は大垣の北からやや西よりになり指呼の間にある。慶長五年九月十四日おひるに、家康が赤坂に入りしを見て、大垣では城を堅守するといふ説と、すぐ赤坂へ夜襲すべしといふ説と相わかれたが此の時東軍は大垣を脇目に見て一路西へ、三成の本據江州佐和山を衝き京洛に向ふといふ情報を得たので、急遽關ヶ原へ先き廻りして家康を迎へうつといふ事に轉向する。午後六時頃大垣城には福原長堯等以下小勢を残し南宮山の南を迂回し、大雨を衝いて關ヶ原に出て、北國街道を中仙道の隘路にま

たがり、東軍を阻止すべく笹尾山から松尾山へかけ陣營を張つた。ここで考へさせられる事は攻城といふ事と、スバイといふ事である。西南戦争の時に薩軍は熊本城を圍んだ。もし官軍が城を出て戦つたならば、戦は即座に決せられたであらうし、又薩軍の勝ちになつた事と思ふ。しかし官軍は籠城したから、熊本城を脇目に見て薩軍が東上したならばどうなつたであらうか、沿道風を望んで薩軍に合流したのではなからうか。吾等桐野の籠城説と篠原の進軍説とが兩立したと聞いてゐる。もし篠原説になつてゐたら、形勢はかり知るべからざるものが有つたに、惜しい事をしたと、子供心に敗れたる西郷さんに同情したものであるが、今ここにその昔の古い古い思ひ出が湧いて出た。

十七、關ヶ原古戰場 其三

野戦と逆スバイ

攻城には手間がかかる、僅かな軍勢でも數倍數十倍の大敵に圍まれて、かなりの籠城がつづけられる。金剛山千早の城はいはずもがな、秀吉の大軍に圍まれた備中高松の城、相州小田原の城、武田勢に圍まれた三州長篠の城、さては幕軍が持てあつた島原なる原の城、近くは日露戦役の旅順の要塞、今直面せる上海郊外のあの小さなトーチカでさへもと、そんな事を長々とならべずとも、當時中仙道より西進せんとした徳川秀忠の大軍は、信州上田の城で眞田の小勢に喰ひ止められ、たうとう關ヶ原には間に合はず仕舞ひになつてゐる。

攻城戦は長期に亙る憂ひがある、必勝を期してゐる家康としては早くラチを明けなければならぬ、籠城されるとさくさくなる、時がかかる、野戦となれば半日一日で勝負がきまる、同じ事なら少しでも早く片付けるにかぎる。さうした心持ちからいへば西軍が大垣城をあとに大雨ををかし、遠廻りして關ヶ原の西へ乗り出したといふ事は、家康の思ふ壺へはまつたのである。何はさておき西軍が勝つて白面の小冠者石田が此の上のさばる事は癩の種であるから、豊臣の直參連は何よりも石田を叩きつ

けたい、さうした根深い感情の隔たりは、現に當時加藤清正も肥後から島津へ攻めにかかつてゐたといふ事である。その上に天下の大勢は徳川にうつると日和見をする連中のなかにも、金吾中納言秀秋のやうに裏切つて、味方の横つ腹へ突つかかる篤志家もある。しかしさうした藝當のうてるのみみな野戦なればこそである。此の如くにして西軍總勢九萬と號したが、いはば家康を袋の鼠にしながら、袋の尻の方なる南宮山の毛利、吉川、長束、安國寺、長曾我部の諸軍勢は、旌旗動かす鳴りをしづめてゐる。小早川秀秋をはじめ脇坂安治、朽木元綱等は味方を裏切る。十五日の午前八時頃福島正則が宇喜田勢を攻め立ててより、午後三時には戦ははや収まり、西軍は大敗となり陣場野で家康の首實驗となつてゐる。

攻城は手間どる。如何にして家康は西軍を大垣の城中から引きずり出したか、それはスパイの働きである。

スパイに二種ある。俗にいふスパイは敵へ内通するのである。ソ聯邦では盛んに黨中黨をつくり、スターリンは手に手をとりに新政府をつくり上げた名士たちを文武にわたり、片つ端からスパイ扱ひにして銃殺してゐる。支那でも昨今漢奸といふ名を冠し、無性やたらに血で血を洗つてゐる。

しかしスパイの中には逆スパイがある。スパイの如くに装うて、實は敵の爲めでない味方の爲めに

逆の放送をするのである

家康は赤坂へはいつた。その家康は大垣へは眼もくれず西進すると、大垣の城中へ放送したのはこの逆スパイである。その手にのつて西軍は大雨の中を關ヶ原に泳ぎ出たのである。逆スパイ？ そんな詞はあるか無いか知らぬが、さうした事實は稀でない、かなり効果百パーセントである。春秋戰國時代には、かかる逆手を反間苦肉の策とうたつてゐる。

吾等一行は今黒田長政が狼烟を上げたといふ丸山の高所に立ち、藤井君が指さすままに話すがままに、一と目に見渡す關ヶ原の跡を、右の方石田三成の陣せし笹尾山をはじめ、島津、小西、宇喜田、大谷諸將の陣營より小早川の松尾山へ、中央には關ヶ原の町を中心に東軍の各部署を眼の下に、島津維新が敵陣に割つて入り切りぬけた鳥頭坂道、毛利、吉川、長束、安國寺、長曾我部の諸將が日和見した南宮山一帯を、それからそれへと見はるかす、それら家康の軍を進めた陣場野を経て笹尾山に三成の陣所のとを弔ひ、小西行長宇喜田秀家のよりし天満山から官上の大谷吉繼の陣所、之に向つて藤堂高虎、京極高知、福島正則等の陣營があたかも不破の關趾を中心にしてゐる。引きかへして島津義弘が其間に陣場野へ突進して、その前をすぎ牧田へ抜ける鳥頭坂なる島津盛久の墓碑を弔ひ、一と通り戦跡を一巡したのであつた。

十八、關ヶ原古戰場 其四

古戰場觀光ルートと歌

終りに關ヶ原觀光について一言して見たい。之れがウオータールーでもエナでも歐洲の古戰場さてはアメリカの獨立戦争の記念場などであれば、多くは記念塔が立つてゐる。そばにはレストランがある、休憩場がある。繪葉書や案内書、繪圖面などの賣店は無論である、記念塔又は戦場の模型なり、戦争の立役者の像なり、文鎮、おきものなどスーヴニールの店がならんでゐる。

しかし日本では川中島でも小牧山でも關ヶ原でも、金剛山千早城でも、湊川でも、一の谷でも、高松城でも、さうした設備があまりにも物足りない。屋島の風光を見物するときに、御景物に屋島の古戰場が紹介されるのが上の部である。

時節柄武張つてゐるからとわざわざ書き立てるわけではないが、さうした古戰場見學といふ熱も流行さしてよい、ハイキングをかねてもよい。これは鐵道省の方でもはじめてゐる。苟も日本民族ともあらうものが、只神社佛閣の參拜、景色見物ばかりに偏する要はない。關ヶ原にしてが折折軍人はみえるがその外の行客は至つて稀であるといふ。よろしく觀光局より府縣觀光協會の肝煎りで大いに設

備もする宣傳もする。之れは何も關ヶ原のみについていふのではない。東海道線には長篠と三方ヶ原桶狭間と小牧山、關ヶ原と姉川に賤ヶ嶽。さうした古戰場をチェーンにして見學旅行するなど最も妙である。それは士氣を練り、歴史と地理を學ぶ上より見ても極めて有意義である。

猶此の關ヶ原行につけ加へておきたい事は、そこに幾多の史蹟が惠まれてゐる事である、關ヶ原の松尾といふ處が、日本の關の一つなる不破の關のあとであり、壬申の亂は關の藤川をさしはさんで戦はれ、謡曲にある班女の古跡は野上の里であり、關の藤川からいくばくもなく不破の關屋へと志ざした足利義教の車かへしの坂があり、美濃近江の國境寢物語の里へとつづいてゐる。

かうした名所舊跡が場所もあらうに東海道線に沿うてゐる、驛の名まで關ヶ原と銘打つてゐる。それにしては餘り世間から忘れられてゐる、せめて世間並だけの設備と宣傳があつたならばといふ思ひの切なるままに、此の一文を筆にして見た。(『旅』十三年新年號)

長曾我部毛利長東安國寺なりをしづめて日和見せしところ (南宮山)

ここに於て夕時よしと高虎が合圖の狼煙あげたるところ (丸山)

穀を出て日に干されけりみそささえ三成あはれをとどめしところ (笹尾山)

義弘が殘兵を束にし敵陣の眞つ只中を切りぬけしところ (古床几場)

病める身を駕籠のままにて吉隆が敵のさ中へ乗り入れしところ（宮中）
 あなうたて金吾中納言秀秋が味方の陣へ裏切りしところ（松尾山）
 日午をすぎいく時ならずいくさはてて徳川家康首實驗のところ（陣場野）
 これやこの天下分け目の古戰場關ヶ原といふに人は訪はなくに（關ヶ原）

十九、屋 島 其 一

屋島の歴史

高松の棧橋に上る人、琴平詣での人たちは時さへゆるせば、いや時をつくりても屋島に出かける。それは国立公園瀬戸内海を見はるかす評判の観光地帯であるといふばかりではない。四國八十八ヶ所の札所屋島寺にお参りしたいからでもない。源平盛衰記で佐藤嗣信の戦死、那須の與市の扇の的、さうした古戰場屋島といふ名が引きつけるからである。まして風光は絶佳である、高松から程遠くも無い。四國の土を踏む位の人はいづれも足を屋島へはこぶに不思議がない。しかし屋島の歴史は遠く天智天皇の御宇屋島の築城にはじまり、孝明天皇の御宇の高松藩地の海防に及んでゐる。香川縣坂出なる鎌田共濟會調査部印行の岡田唯吉君の屋島史を見ると次の如くである。

- 一、天智天皇六年（紀元一三二七年十一月）讚吉國山田郡屋島城を築く（日本書紀）
- 二、文武天皇、大寶二年（紀元一三六二年）大寶令發布の結果、諸國に烽臺軍團を置きたる時、亦此處に烽臺軍團を置きたるか、（屋島城利用）今壇の浦と稱せるは、此國の浦の轉訛ならん。
- 三、孝謙天皇天平勝寶六年（紀元一四一四年）唐僧鑑眞屋島寺を創む。（寺記）
- 四、安徳天皇壽永二年（紀元一八四四年）平宗盛、筑紫より屋島に移り、行宮を建て、將士の陣營を造る、同四年二月十九日、源義經は、阿波より迂回し來り、背後より襲ひ、同二十一日、平軍敗走す（玉葉南海通記、平家物語、源平盛衰記）
- 五、後醍醐天皇建武二年（紀元一九九五年）十一月二十六日細川定禪（鷺田庄にあり）遠く足利氏の軍に應じ兵を八島高松に出し、當國守護、舟木頼重を攻め殺し、又小豆島なる星ヶ城主鮑浦信胤等を平げ四國に威令を振ふ。延元元年四月足利尊氏太宰府を發し、長府に舟師を饜し、五月五日備後鞆に着、同日、海陸並び進む、細川、河野共に兵船五百餘艘を以て、尊氏の軍を迎へ、導いて同十五日備前の兒島下津井に着、尋で再び海陸兩路兵庫に向ふ。（梅松論、太平記、南海通記、海の歴史）
- 六、正親町天皇、天正十三年四月、豊臣秀吉の四國征伐に當り、浮田秀家、黒田孝高、仙石秀久、

小西行長等、七人の兵將、二萬三千人を率ゐ、二十六日屋島浦に上陸して山上に陣し之より讃岐をとらふ。(南海治亂記)

七、孝明天皇、文久三年の頃、(約八十餘年前)外船防禦の爲、高松藩主、屋島長崎鼻に砲臺を築く、嘉永安政以降、外船我邊海に出没し、物情騒然たり。孝明天皇の安政四年將軍家定高松藩主松平頼胤に命じ、大阪木津川口砲臺を衛戍させ、尋で、文久三年(紀元二五二三年)家茂將軍高松藩主松平頼聰(三月朝日、藩地の海防を嚴にさせ、四月に攝津海岸(境川より湊川まで)を守らせ、同十五日内勅あり、松平左近、松平大膳と謀り、海防を嚴にす。

英米佛蘭の下關砲撃はこの五月であり、次で十月には英艦の鹿兒島砲撃があり、高松藩は瀬戸内海東部より攝海の防備につとめ、長崎鼻及び信在鼻(笠居村)に砲臺を築く。元治元年三月幕命により高松藩は公邑女木島、男木島の防禦を托され、その翌慶應元年には英米佛蘭の兵艦大阪灣に入り、遂に廷議も安政の假條約を許される事となつた。

二十、屋島其二

屋島の戦史

以上は屋島の沿革史から抄録した大要であるが、いづれにしても屋島の戦がその中心になつてゐる。しかし源平盛衰記等では要を得がたく、さりとて各所案内記などでは断片の不連続線にすぎない。屋島史は壽永四年の屋島の戦の前後を通じて次の如く簡明に日を逐うて記されてゐる。乃ち、

源平屋島戦争表

- 壽永二年七月二十五日 平氏安徳天皇を奉じ西海に走る
- 同 十月一日 備中水島戦
- 同 三日 平氏の公卿六萬寺に入り詠歌あり(六萬寺記)此頃平家屋島に来る
- 同 十一月 播磨室津の戦(木曾軍京師に退き、平氏瀬戸内を回復)
- 同 三年正月二十日 義仲亡ぶ
- 同 二十六日 平氏の一の谷にかへる
- 同 二十九日 範頼義経院参し平家追討の爲西國に發向
- 同 二月 七日 一の谷戦
- 同 七月二十八日 後鳥羽天皇即位
- 同 八月二十九日 範頼京より山陽道を西海へ發向

- 同 九月 十九日 頼朝は橋次公業を讃岐に遣はし住人に歸伏を説く
- 同 十二月二十六日 備前兒島の戦(佐々木盛綱藤戸の騎渡)
- 壽永四年正月廿六日 範頼豊後に入る
- 同 二月 三日 義經京を出で、屋島に向ふ
- 同 十六日 義經屋島に向つて出船す、南風俄に吹き兵船渚に吹上げ、七八十艘打破し、繕ふため逗留す
- 同 十八日 攝津渡邊(神崎附近か)より風雨を犯して出船し、阿波勝浦(勝浦郡小松島にて徳島市を距る二里廿七町)に上陸す
- 同 十九日 義經牟禮高松に火を放ち、屋島を襲ふ(平軍側の計略の裏をかき源軍得意の陸上より背面攻撃)
- 同 二十日 兩軍勝敗あり、佐藤繼信等戦死す
- 同 廿一日 平軍屋島を出で、志度に移る、義經又之を攻め、平軍遂に西に走る
- 同 廿二日 梶原景時の船軍、屋島に來り會す
- 同 三月廿二日 義經既に周防に入る、大島の津、上の關より壇の浦に向ふ

同 廿四日 壇の浦戦平氏亡ぶ

二十一、屋 島 其三

何故源氏が勝つたか

以上抄録したところによると義經は攝津渡邊から風雨を衝いて阿波の勝浦に上陸、あれから平家側の監視されてる海岸をさけて山路を讃岐に入り高松の民屋を焼き拂ふ。平家は田内教能の三千騎は伊豫の河野を攻めて居り、津々浦々島々に五千騎百騎と分遣してあるから、手勢は千騎足らずである。たま／＼うしろから火の手を上げられるとそれ源氏の大军押しよせたりと帝をはじめ女院、女房、公卿方船に召して内裏を出る。有盛、教經、忠房ら城に立ちこもる、源氏は内裏その他を焼き拂ひ、ここに屋島の第一戦となり佐藤嗣信の戦死となつてゐるが、さて源氏の軍勢といへば阿波へ上陸した時が百五十騎、それから近藤親家等一百騎さし加はり、あちこちより十騎二十騎と三百餘騎となつたとす。

六十餘州兵馬の權を争ふ天下分け目の源平兩軍の至力戦は三百騎と千騎といふのだから兵數の少ないには驚かされる。屋島の戦は三日目に義經又七十餘騎にて内裏の焼跡の平家の陣に押しよせる、平

軍支へず志度へ退く、義經之を追撃する、此時源氏八十騎平家は千餘人源氏の軍を中に取りかこみ戦ふうち、屋島より源氏の二百餘騎がかけつける、それ源氏の大軍襲来とばかり争うて船に乗つたとある。この翌日梶原景時等百四十餘艘の源氏の兵船が屋島につく、河野の三十艘の兵船が加はり、今まで源氏の弱點であつた水軍が振つてくる。河野を攻めた田内が源氏に歸伏する、紀州熊野の別當をはじめ、四國の各地から源氏への加勢が相次いでくる、こゝに源平戦の峠を越し底が見えてしまつたのである。

此時年齢からいへば平宗盛三十九歳知盛が三十四歳教經は義經と同じく二十六歳、那須の與市は二十歳とも十七歳とも傳へられてゐる。いづれも若い、佐官級でない、尉官級である。兩軍いづれも若武者であるが、源氏の寡を以て平家の衆に勝つといふ事はいろいろ理由がある。東國から攻めにかゝつた源氏に地方の人氣が高かつたといふ事は、今までの平家の政治が民心を失つてゐたといふ事になる。さらに直接の原因は源氏は東國の荒武者であり平家は都の風に骨が軟かくなり、もはや武者でなくて月卿雲客のあて人となつてしまつてゐる。武者らしき者も一の谷で多く戦死してゐる。そこへ陣中に幼帝をいたゞき公卿さんや女房だちを抱へてゐるのだから、これではいくさの歩がわるい。平家は七十騎の關東勢に叩き潰されたのである。いかに精神力が大事であるか士氣が肝要であるか、それはこ

のたびの大東亞戦でも、至る處で見せつけられて居る。古今東西を通じてあまりにもハッキリしてゐる。

二十二、屋 島 其四

屋 島 城 今 昔

さらに筆者が屋島史を紹介したのは屋島が古代から對外海防の要地であつたからである。唐に通じた新羅が百濟を亡し次で高麗も唐の亡すところとなるや、天智天皇の御宇兵を朝鮮半島よりひき、海防の備へを立てる事となつた。先づ對馬壹岐筑紫に防と烽をおき、筑紫の都督府の前面に水城、さらに大野及び椽の二城を築き、六年には倭國高安城、讚吉國山田郡屋島城及び對馬國金刃城を、九年に長門に築かれたのであつた。

屋島の南の峯の血の池はじめ多くの池沿は海拔三百メートルに近いが水が湧く當時の軍用水であつたといふ。又北の峰も相似たる高さであるが湧水涸るゝ事なく、西面の溪に城壁が残存し、槽の内その後方の山頂に櫓ヶ丘の名が残されてゐる。尤も山頂の城は海との連絡が困難であるから、海岸近くに石壘でも設けたのでは無からうか、壽永の役にも平家は東麓に陣營した例もあるといふ説もある。

それらは専門家の考證にゆづり、とにかく天智天皇の六年十一月に屋島に築きし事が日本書紀に明記されており、孝明天皇の御宇から屋島長崎鼻、攝津の海岸、大阪木津川口などに海防を嚴にする事となりしは前に記せるが如くである。

國防のまもりとして屋島や木津川口に砲臺をつくる。それは當時としては少しも珍らしくない、江川太郎左衛門により築かれた品川沖の臺場については、伊豆遊記の中にも記してあるが、日本國中津浦々黒船來るの聲に至るところに砲臺はつくられた。

それについても思ひ出される事はあの九州線の鐵道が沿道の人や物資の動きからいつても、建設の工事費その後の運輸力から見ても、熊本から海沿ひに川内^{せんだい}を経て鹿兒島に入るべきものが、八代から球磨川に沿ひ相良までさかのぼり、加久茂越のスパイラルの難工事を強行して鹿兒島に下る、それは國防の上から川内線は危険であるといふのであつた。さうかと思へば周防灘に沿ふ山陽線も柳井津廻りは國防上危険なりと随分反對論が強かつたのであり、そういへばあの關門海峡は守りが固いから、敵國の軍艦は通れないのだが、佐多岬の角を廻り日向灘からやつてくるのが厄介だよ、といふ講釋を聞かされた事もあれば、日露の役旅順の要塞がどうしても陥落しない、とうとう砲臺をはづして持つてゆくのだよと聞かされた事もある。

今日では瀬戸内海の守りが日本海へ泳ぎ出る。その日本海が支那海へとさらに進出する。今の日本海は當時の瀬戸内海より狭くなつて來た。今や大東亞戰により皇軍が太平洋の東のはてから、南洋、印度洋まで鵬翼をのぼす世の中になつて見ると、只々此世の移りかはり、それもこの一世紀間の急速なる夢見る發展はあまりにも眼ざましい。我等はよくも日本國民として生まれた、しかもこの輝かしく大御代に生まれ合はしたものである。(十七、一、十一)

(出文協承認)
あ340007號

趣味と青年



【110000】

昭和十八年一月十日印刷
昭和十八年一月二十日發行

定價 二 圓 〇

著者
編輯者
發行所及
發行者

著者 下村海南
編輯者 高島政衛
發行所及發行者 潮文閣
東京市小石川區小日向通町一ノ四一

潮文閣
電話大塚六二四八・六四三番
振替東京一七四四三番
會社番號一一七、五〇六五

印刷所

帝都印刷株式會社
東京市板橋區板橋町三ノ六四

配給元

日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町二ノ九三

終